ヴィルヘルム・ペリカン
「薬用植物」について

Wilhelm Pelikan
Grundriss einer Heilpflanzenkunde

〔目次〕

植物と人間における元型的な関係

病気プロセスと薬用植物

薬用植物学概論

1　人間と植物
2　典型的な薬用植物
〔シソ科〕
〔セリ科〕
〔キンポウゲ科〕
〔サボテン科〕

神秘学遊戯団

■ヴィルヘルム・ペリカン
Wilhelm Pelikan
「植物と人間における元型的な関係」
Archetypal Relations between Plant and Man

米国ヴァルドルフ教育研究所の
『治療が教育となるとき：人智学医学紀要選集』Vol.3から。

※1970年に、British Homoeopathic Journal（Vol. 59）で
英訳掲載されたもの。
（『Heilpflanzenkunde:
Der Mensch und die Heilpflanzen』からの英訳）

最初に、ヴィルヘルム・ペリカン
（Wilhelm Pelikan, 1893–1981）について。

ペリカンは、人智学薬学）、薬用植物学、金属療法の分野で
多大な貢献を残したオーストリア出身の化学者、研究者。

ドイツのヴェレダ（Weleda）の研究所長を約40年間にわたり務め、
シュタイナーが遺した広範な治療・処方のアイデアを、
近代的な製薬プロセスに適合する形で体系化。
バイオダイナミック農法で育てられた植物から、
薬効成分を抽出する製法技術の発展に大きく貢献した。

『植物の癒しの力』全3巻では、
人間と植物の複雑な極性理論について、
実際の薬用植物のゲーテ的な形態観察を通じて論じている。

また、人智学的医学の重要な柱である
「7つの古代金属と宇宙の連動」についても深い研究を行い、
著書『七つの金属（金属の秘密）』では、
金・銀・鉄・水銀などの金属が、地球の地質学的な形成、
宇宙（惑星）の波動、そして人間の臓器と
どのように結びついているかを化学・精神科学の両面から論じている。

以下、「植物と人間における元型的な関係」について。

●基本的な視点

ゲーテの植物形態学とルドルフ・シュタイナーの人智学を基盤に、
植物と人間の「元型的な関係」が考察される。

植物は人間の「鏡像的な極性対極」として存在し、
葉＝中間（リズム）、根＝上方（神経）、花果＝下方（代謝）
という逆転した対応を示す。

この元型的な関係は、ゲーテの形態学を
医学的・治療的な「マテリア・メディカ」の基礎に高め、

植物薬の作用を深く理解するための鍵となる。

植物界は人間が失った宇宙的開放性を保持し、
人間は植物が持たない内面化・個別化・意志を実現している、
というダイナミックな補完関係が論じられている。

●要点

1）ゲーテの植物形態変容の概念

ゲーテは植物を「生成されつつあるもの」として捉え、
完成した形態ではなく形成のプロセスに焦点を当てた。

植物のライフサイクルは
「拡張」と「収縮」の3つの変奏として展開される。

① 種子（収縮） → 茎葉の成長（拡張）
② がく（収縮） → 花（拡張）
③ 種子（収縮） → 果実（拡張）

生命力は形態が未完成な部分（種子・芽・根）に強く、
完成された美しい形態（花）では
最も短命で脆くなるという逆説が示唆される。

2）植物と人間の三分節構造の元型的な対応

植物も人間も三分節構造を持ち、
互いに極性的対応（polarity）と順行的対応の関係にある。

〔物の部位〕
・対応する人間のシステム
・関係の性質
・主な特徴

〔根〕
・神経・感覚系（頭部）
・極性対照（逆）
・地球・重力・鉱物化 vs 重力超越・硬化・思考

〔葉〕
・リズムシステム（胸部・呼吸循環）
・順行的対応（同調）
・リズム的呼吸・同化 vs 異化・酸素摂取

〔花・果実〕
・代謝・四肢系（腹部・手足）
・極性対照（逆）
・宇宙開放・形態/物質形成 vs 内部化・意志・運動

・葉とリズムシステム：
植物の中心器官。
昼夜のリズムでCO_2を取り込み酸素を放出（同化）。
人間は逆で、O_2を取り込みCO_2を排出（異化）。
葉緑素（Mg）とヘモグロビン（Fe）は
化学的に極めて類似（4つのピロール環）。
緑は赤の蛍光、赤は緑の蛍光を発する極性。

・根と神経・感覚系：
根は地球の塩類・重力を「知覚」し、物質を生命化・軽力化。
頭部は重力超越し、生命を抑制して骨格・思考を生む。
両者は極性的対照。

・花・果実と代謝・四肢系：
花は宇宙開放・形態強調、果実は物質・熱・栄養蓄積。
人間の代謝系はこれを内面化し、意志の基盤とする。

3）重要な洞察

・植物と人間は直線的進化関係ではなく、
元型的一体から分離した極性存在。

・植物は宇宙に対して「開かれ」、
人間は宇宙のプロセスを体内に取り込んで自律化。

・植物の各部位から作られる薬は、
人間の対応する（または極性対極の）システムに特異的に作用する。
（例：根の薬 → 頭部、神経系に効く）

4）人間の三分節化

人間の身体は単なる分割ではなく、互いに浸透し合う三分節：

・神経・感覚系：思考・観念化の基盤（頭部に集中）。
・リズムシステム：感情・感性の基盤（胸部に集中、呼吸・循環）。
・代謝・四肢系：意志の基盤（腹部・四肢に集中）。

これらは独立しておらず、互いの内部に浸透しながら、
各々が最大集中域を持つ。

●本文

〔ゲーテの先駆的な業績〕

ルドルフ・シュタイナーは、ゲーテを「有機界のケプラーでありコペルニクスである」と評しましたが、ゲーテは自らの「形態変容（変態）」の概念を通して、植物の動的なイメージを人間の認識に対して開き、植物を「感性的かつ超感性的」な実体として捉えました。

彼が探求したのは、すでに生成されて目に見えているものではなく、まさに「生成されつつあるもの」でした。完成された形態ではなく、形態を生み出すプロセスです。生成されると同時に死にゆくものではなく、その中で生き続けるもの、すなわち形成の法則、変容する形態、元型の生命要素、そして植物の本質です。

ゲーテは、この植物の本質が、直接の知覚を超えた霊的な力の世界から、いかにして物質的世界へと参入していくかを、3つの大きな発展段階を通して説明しています。また、それが物質世界において感性的に明らかな形態として現れ、その後、再び「超感性的」な本質の領域へと「去っていく」プロセスを描き出しました。

これら3つの発展段階は、「拡張」と「収縮」の力が織りなす相互作用の3つの変奏曲として捉えることができます。

1）収縮した「種子」や「芽」から、葉を茂らせた「茎葉」が伸び広がります（拡張）。

2）これが「萼（がく）」において再び収縮し、「花」において再び開きます（拡張）。

3）最終的には「種子」において再び凝縮し、「果実」の形成において広がります（拡張）。

そしてこの種子から、生命のサイクルが再び新たに始まるのです。

この生命のサイクルを深く観察していくと、ある重要な発見に突き当たります。すなわち、植物の要素がその外的な、目に見える形態や構造において完璧に現れれば現れるほど、それは生命のエネルギー（生命力）をより多く失っている、ということです。

生命力に満ちあふれている構造、たとえば「種子」「芽」「根」「シュート（若枝）」などは、常にその形がまだ完全には形成されていません。

一方で「花」（たとえばバラなど）において、植物は感性の世界で持ちうる最も完璧な姿として現れます。しかし、それは極めて短命でもあります。最も崇高な形態は、最も短い寿命、そして大いなるはかなさと表裏一体なのです。

したがって、ゲーテの形態変容（変態）の概念は、生命を探求する上での基礎となる礎石であり、そこで明かされた生命の法則は、ケプラーが発見した法則に匹敵する重要性を持っています。将来のすべての植物学者は、このことを考慮に入れなければならなくなるでしょう。

しかしながら、現在の形態のままでは、この概念がそのまま「医療物質誌（materia medica）」へとつながるわけではありません。植物と人間との間にある「元型的な関係」を研究することによってのみ、そのような医療物質誌の基礎を築くことができるのです。これらの元型的な関係は、のちにルドルフ・シュタイナーによって発見され、記述されました。

〔三分節構造の植物と人間〕

○葉のプロセスとリズムシステム（律動系）

あらゆる理論を超えて自然そのものが自らを明らかにする、こうした「元型的な関係」の存在を示す最も主要な兆候の一つが、植物の呼吸と人間の呼吸の関係、そして植物の葉緑素（chlorophyll)）と血液の赤色素（haematin）の関係です。これは私たちを、生命における元型的な極性（polarities）の一つと直接に向き合わせます。植物の根本的な器官であり、植物が植物として最も強く純粋に現れる器官は「葉」とそれに属す

る「節」であり、植物の他のすべての部分は、これの形態変容（変態）として捉えられなければなりません。したがって植物は、自身と人間との間にある元型的な関係を「葉」の中に探すよう、私たちを誘っているのです。

外見的にも、節の上にまた節がリズムを刻んで反復しながら積み重なっていく葉群は、明らかに植物全体の「中間部分」であり、その「リズムシステム（律動系）」です。人間におけるその対応物は、身体の中間にあるリズムシステム（律動系）であり、解剖学的には脊椎とそのリズム的な連なり、そして胸郭を形成する肋骨のリズム的なアーチ構造に基づいています。

植物の呼吸と同化作用（同化プロセス）もまた、昼と夜の光の移り変わりに調和して「リズム的」に行われます。これらは、人間の呼吸およびそれに伴う異化作用（異化プロセス）に対して、完全な「極性的対比」を示しています。葉は大気から二酸化炭素を取り込み、それを炭素凝縮のプロセス、すなわち植物の物理的（物質的）な部分の大部分の材料を提供する炭水化物の変容プロセスへと送ります。その過程で酸素が放出されます。

一方、人間においては、リズムシステムが胸部の組織において酸素を取り込み、身体の「炭素的なもの」を分解して、その凝縮に抗いながら二酸化炭素を排出します。どちらのプロセスもリズム的であり、流体（液体）の要素と気体の要素の間で起こりますが、その進む方向は正反対です。

気管とその分枝である気管支の空間を備えた肺の中空構造は、一つの「理想的な樹木」と見なすことができるでしょう。それは本物の樹木のように、血液で満たされた肺という内なる世界に対して二酸化炭素を取り込み、酸素を与えます。その全体像は、人間と植物のリズムシステムの間にある理想的な関係性を、自然自らが描き出した図式なのです。

気体の要素において見られたものと同じリズムのプロセスは、流体（fluid）や半流体の領域（semi-fluid spheres）でも観察することができます。葉の色素――ここで自然はいかに明瞭に私たちへ物事を語りかけてくれていることでしょう――はその物質的な組成において、血液の色素と驚くほどよく似ています。どちらの場合も、呼吸を司る金属元素が4つのピロール環に囲まれており、唯一の違いは、植物ではその金属がマグネシウムであり、人間では鉄であるということです。

植物もまた、葉緑素を形成するために鉄を必要としますが、この鉄は構造の内部には入らず、その外側にとどまります。これに対して、人間は鉄を「体内へ取り込み」ます。逆に、葉緑素を治療薬として用いると、人間の造血作用を強力に刺激します。

血液の色素と葉の色素の間にあるこの大いなる類似性の一方で、私たちは外的な現れにおいても、この2つが「極性的な対照」をなしているという事実を見落としてはなりません。緑の色素である葉緑素は「血のような赤色」の蛍光を発し、赤の色素である血液は「葉のような緑色」の蛍光を発するのです。

これは生命の元型的な現象であり、同時に、極性的な対立の背後にはやはり「隠された統一」が存在していなければならず、それが真の「分離（dis-unity / 一つだったものの分裂）」を表しているに違いないということを示す好例でもあります。

このことを把握すると、私たちはさらに踏み込んだ結論を導き出さざるを得なくなります。それは、より高度に発達した存在である人間が、より未発達な存在である植物から（直系として）進化したわけではない、ということです。元型の存在（始原の存在）が「自らを分離し」、植物という生命形態を投げ捨てたからこそ、人間の生命形態が解放され、現れることができたのです。

植物と人間との元型的な関係、およびその極性的な対立は、地球存在の進化の中にその原因があるはずであり、私たちはそこに目を向けなければなりません。地球と人間の進化について私たちが抱くあらゆる概念

は、こうした根源的な事実を考慮に入れる必要があります。現代の主流派の学説はこの点を見落としていますが、人智学的な精神科学によって示される世界と人間の進化の記述においては、これが考慮されています。しかし、これについては後の章で詳しく述べます。

要約すると、次のように言えます。人間と植物のリズムシステム（律動系）は、互いに極性的な対照として対応している。 葉の領域から作られた治療薬が、いかにして胸部の器官（呼吸や循環器系）に作用するか、さらには他のすべてのリズム活動に作用するかについては、後ほど多くの例が登場します。

人間においてリズムシステムが2つの極性の間で仲介役を務めているように、植物においても全く同じことが言えます。人間においては、主に頭部に集中しつつも身体全体に広がっている「神経・感覚系（the sphere of nerves and senses）」が、主に腹部に集中しつつも有機体全体に浸透し、臓器の観点からは四肢の活動をも含む「代謝・四肢系」と対峙しています。植物においては、リズムを刻む「葉のシステム」が、花と根のプロセスのちょうど中間に位置しています。

人間に見られる三三分節構造と、植物に見られる三分節の形態は、私たちにその関係性をさらに深く探求するよう促しているのです。

○根のプロセスと神経・感覚系

まず初めに、下方へと目を向け、根について観察してみましょう。根を通して、植物は地球とその力の圏域（力圏）に属しています。また、根は植物がその下方にある自然界、すなわち死んだ鉱物界と取り組むための器官でもあります。根は重力の支配を受けており、「向地性（geotropic,）」、すなわち「地球に対して感受性」を持っています。これは、シュート（若枝）や葉が「宇宙に対して感受性（sensitive to the earth）」を持っているのと同じです。根の細胞からは、重力を感知する器官である「平衡石（statoliths）」が発見されています。

しかし、根は土壌の物質的な条件、すなわち水分の含有量や塩類の濃度に対しても「感受性」を持っています。根は、その物理的環境と「知覚的な接触」を保っているのです。これはちょうど、頭部がその感覚器官を通じて、自らを取り巻く物理的環境、すなわち感性の世界と接触しているのと同じです（ただし、感覚器官が頭部に明かすのは、外部の鉱物的な、そして物理的な側面のみです。私たちの感覚知覚は、周囲にある対象の生命活動や、魂・精神に属する条件を捉えることはできません。感覚知覚は、それらを単に対峙する『対象』、すなわち『障害物』のように知覚するだけです。人間がより高次の知覚形態を発達させるまでは、これを超えるものはすべて思考によって把握されなければなりません）。

根は、環境の中で「知覚」したものを、そこへ向かって能動的に成長していくことによって掴み取ります。根は選択能力を働かせ、それぞれの種に特有のやり方で、地球からあれこれの物質をきわめて具体的に取り込み、種ごとに固有の「塩類組成」を作り上げます。植物の灰分を分析しても、得られるのはその死んだ影にすぎません。

このプロセス全体は、物質的レベルにおいて、脳や神経の機能の中で感覚知覚が取り込まれ、処理される方法と類似しています。根において、塩類と水は活性化（生命化）され、重力や地球の法則から引き上げられて、植物自身の組織へと引き渡されます。取り込まれた塩類のプロセスを通じて、鉱物化のプロセスが植物全体に行き渡り、そのすべての生命プロセスに浸透します。このようにして、植物は真に地球に属する存在となるのです。硬化と鉱物化のプロセスは人間の頭部からも発せられており、頭部は私たちの身体の中で最も硬化し、鉱物化（石灰化 calcified）した部分です。

しかし、このような類似性を一瞥する際には、常にその「極性」をも探さなければなりません。根のプロセスと頭部のプロセスは、極性的な対照（正反対）として対応しています。

頭部は、その内部で高度に組織化された脳を浮遊させながら、重力を超越して（重力の上に）立ち上がります。これに対して、根は重力の一部となります。しかしながら、根は取り込んだ物質を重力から力ずくで奪い取り、死んだ物質を蘇らせ、植物の持つ最高の生命力をもって死んだ鉱物と出会い、それを「軽力（浮力 / levity）」の力へと引き渡します。根は、植物の中で最も生命力（活力）に満ちた器官なのです。

これとは対照的に、頭部においては、生命プロセスを最も強力に抑制するために極めて洗練された技巧が用いられています。ここでは、かつて人間の生命力の中に取り込まれた鉱物的なプロセスが、人間の形態をとるように強制されます。この人間の形態をカルシウム（石灰質）の骨格として現れさせるという、大胆な偉業が成し遂げられているのです。この骨格の形態は、生命の通っていない鉱物の形態とは最大の対照をなしています。まさに創造の傑作です。骨格とは、「人間の鉱物」なのです。

したがって、頭部および神経・感覚の領域には、植物の根のプロセスに対応する、人間側の対応物（counterpart ）にして極性的な対照（opposite）を見出すことができるのです。根から作られた数多くの医薬品が、頭部や神経に対して顕著な効果を発揮するという事実が、このことを証明しています。これについては、後の章でさらに詳しく論じることにします。

○花と果実のプロセス、および代謝システム（代謝系）

葉から根へと下降していく過程で、私たちは葉の形態やそれに属するリズムの連なり（周期性）を見失っていきました。そこには、ある意味で節とその脈管だけが互いに密に押し合わされ、ほとんど形態を持たないまま、高度に動的で、濃縮され、吸引する器官である「根」として残されています。

これに対して、花と果実の領域へと上昇していくとき、私たちはやはり形態が高度に発達した領域へと進むことになります。純粋に植物的な要素である「緑の葉」は、より高次の形態形成原理によって統治され、そのための素材（材料）となります。単に一枚の葉だけでなく、無数の葉が一体となり、新たな構造として現れるのです。緑の色、そしてそれに属する同化機能は失われます。厳密な数学的法則に従って螺旋状に上方へと昇っていく葉序のリズムは抑えられ、円運動（輪生）へと変化します。時間の経過とともに順次現れていた葉の配列は、空間の中で並列する配置へと変わり、そこに新たな数理的法則が加わることで、全く新しいものが確立されます。

本来であれば無限へと広がる平面の一部であり、無限に触れ、無限の宇宙から養われているはずの葉は、ここでは球状の表面へと湾曲（屈曲）します。碗）、鐘状、あるいは筒状の形を形成しながら、それは内なる空間を包み込みます。これに対して、通常の葉にとっては、ただ一つの空間、すなわち「外なる空間」しか存在しません。その内なる空間の奥深くには、節の最高の発達形態である「子房」が包まれています。

ここでは、色彩、香り、蜜、熱、そして花粉が「放射され」ます。そして、空気中から、あるいは動物の活動によって花にもたらされた花粉が「吸い込まれ」ます。最後の収縮である「種子への濃縮」に、ここでは最後の拡張である「果実の膨張」が付け加わります。この果実は、もはや単に空間を囲み、それを包み込んでいるだけの構造ではありません。なぜなら、今やその内なる空間は、内なる物質（果肉など）で完全に満たされているからです。

遠く離れた外なる世界が、物理的な物質そのものへと「内面化」されたのです。この物質は、外部からもたらされる多大なる「熱」の助けを借りて発育します。一部の花にいたっては、植物が自らある程度の熱を発生させることさえあります。根において植物は水と塩類を必要としますが、果実においては、成熟のための温熱と、降り注ぐ宇宙の放射（宇宙線）を必要とします。夏という季節の持つ全エネルギーが、果実の形成の中に閉じ込められているのです。

生殖プロセスとの結びつきから、私たちはすぐに植物の上部器官（花・果実）を、人間の「腹部器官」と関連づけます。しかし、これは実際には、代謝の球圏（代謝系）全体に対して、より包括的に当てはまることなのです。

ここで特に注意を払うべきなのは、これらの結びつきの「あり方」です。植物は世界に対して「開かれて」います。このことは、植物の主要な器官である「葉」の形態と機能によって明確に示されています。本来、葉はそれ自身が属する無限に巨大な球体に接する「平面」です。この宇宙の球体から、植物における代謝プロセスの基礎を形成するか、あるいは少なくともそれらに影響を与えて統合するような活動や作用が放射されています。これらの活動は植物の内部に取り込まれますが、その衝動を与える中心源は、外部の宇宙に残されたままです。

これに対して人間は、これら衝動の中心源を、自らの内なる臓器の世界（体内）へと取り込みました。肝臓、腎臓、心臓、胆嚢などは、人間の全体性と調和しながら、自律的にその任務を果たしています。しかし、植物が同じ任務を果たすためには、外部の宇宙と一体にならなければならないのです。（たとえば、植物における炭水化物の合成と分解は、昼夜のサイクルや四季のサイクルといった、太陽と地球のリズムに従っています。しかし人間においては、生命プロセスにおけるこの炭水化物代謝は、四肢を動かす「意志の衝動」の支配下に置かれているのです。）

葉から花、果実、そして種子の形成に至るまでの、それぞれの植物種に固有の代謝活動は、まさにその種に決定的に固有の物質の合成および蓄積プロセスとして捉えることができます。この果実の要素は、植物界よりも上位にある自然界（動物や人間）の他者を養うために役立ちます。花においては、このプロセスはより「形態」において表現され、果実においては、より「物質」において表現されます。

花が発達させる形態は、それが動物の形態や動物の本質に近づいていくそのあり方によって、そこにどのような力が関与しているかを私たちに伝えてくれます。すなわち、花の形態が生じるためには、通常であれば動物や人間の本質に属するような様々な傾向が作用し、植物の生命原理の中へと受け入れられなければならないのです。

果実の発達においては、植物本来の形成原理や葉の形態からの逸脱はさらに大きくなります。そうしてできた果実は、栄養物質として、人間の代謝・四肢系の形態や可動性（運動性）の中へと直接的に摂取される）とになります。

このようにして、植物における「葉の上方の領域（花・果実）」に対する極性的な投影（対応物）は、人間における「リズムシステムの下方の領域（代謝・四肢系）」に見出されなければならないということが明白になります。植物の花の要素が、人間の代謝領域に対して持つ医薬的な作用（薬効）は、こうした結びつきをよりいっそう強調しているのです。

これらを「図（ダイアグラム）」として表現すると、次のようになります。

※図

【植物と人間の対応関係図】

【植物】　　【人間】

花の領域 ＜ー（極性対応）ー＞代謝・四肢系
　　｜
葉の領域 ＜ー（順行対応）ー＞リズム系）
　　｜

根の領域 ＜ー（極性対応）ー＞神経・感覚系

〔人間の三分節構造に関する簡潔な言及〕

人間の有機体における機能的な三分節性（三分節構造）の発見、およびその体系的な記述は、ルドルフ・シュタイナーの功績によるものです。30年間に及ぶ予備的研究を経て、彼は1917年に著書『魂の謎について（Von Seelenraetseln）』の中で、その最初の概要を発表しました。この本では、人間の魂と物理的・身体的要素との関係が記述されています。

一方では感覚器官へと伸び、他方では内なる物理的組織へと広がっている神経のプロセスは、魂の「観念化（思考・表象）」のプロセスの物理的な対応物です。この点については、多かれ少なかれ現代の科学的思考とも一致しています。

新しかったのは、観念化と神経活動が結びついているのと同じように、「感情」もまたリズムのプロセス（律動系）、すなわち「呼吸活動にその焦点を持ち、組織の最も遠い末梢（周辺部）にまで呼吸活動と結びついている生命のリズム」に関連づけられなければならない、とされた点です。

そして、魂が「感情」において呼吸システムを基盤としているように（ただし、神経・感覚プロセスと出会うことで、意識の中で感じられたことの精神的イメージを反映させながらでもあります）、魂の「意志」の活動は、有機体全体の「代謝プロセス（代謝系）」を基盤としています。何かが意図される（意志が働かされる）とき、「代謝プロセスが発生し、私たちが『意志』として経験することの物理的基礎を提供する」のです。

しかしながら、完全に意識的な「目覚めた経験（覚醒経験）」として存在するのは、神経系を媒介として形成される精神的イメージ（思考・表象）に対してのみです。通常の意識において、呼吸のリズムによって媒介されるものはすべて、「夢のイメージ」程度の力しか持っていません。すなわち、あらゆる感情、情感、情熱などがこれに当たります。

そして、「代謝プロセスに基づく意志は、睡眠に伴う極めて鈍麻したレベル（昏睡レベル）よりも高い意識レベルで経験されることはない」のです。意志の経験は、「意志の概念」とは区別されなければなりません。「意志とは精神的な概念である。なぜなら、魂の概念的な経験の内部に、非概念的なものが入り込んでくるからであり、それは、睡眠が意識的生活の進展における中断を表しているのと非常によく似た形で、完全な意識的経験の中に入り込んでくるからである。」

いわゆる「運動」神経のシステムもまた「知覚」のために機能していますが、それは、意志の活動の物理的基礎を提供する微細な代謝プロセスの知覚のために機能しているのです。

人間の「三分節性（三分節構造）」を、人間の身体を単純に3つに分割（区分）することだと捉えるのは誤りです。神経活動、呼吸のリズム、そして代謝活動は、「横に並んで存在しているのではなく、一方が他方の内部に存在し、互いに浸透し合い、入り込み合っている」のです。

代謝活動は有機体（身体）のいたるところで行われており、リズム器官や神経活動の器官にも浸透しています。しかし、代謝活動がリズムに浸透しているとき、私たちはそこに「感情」の物理的基礎を結びつけることはできません。また、代謝活動が神経活動に浸透しているとき、そこに「観念」の物理的基礎を帰属させることもできません。これら2つの領域（リズムと神経）において、代謝活動は、リズムや神経に浸透している「意志」の活動と結びついたままであるからです。

神経系の内部において、「代謝は、それが意志で満たされている度合いにおいて見出される」のです。また、「リズム（律動系）の中に存在するあらゆる代謝活動は、その器官に内在する意志の要素と関係している」のです。

神経の内部で見出されるのは、代謝プロセスやリズムプロセスだけではありません。観念化の基礎を形成する物理的なプロセスも見出されます。これらは、ただ「（生命プロセスの）排除プロセス（異化・崩壊プロセス）」を通じてのみ見出される、分解（異化）と麻痺（静止）のプロセスなのです。

これについて、ここでさらに深く立ち入ることはできませんが、読者の皆様には、先ほど言及した書物（『魂の謎について』）を読まれることを強くお勧めいたします。ここで極めて重要なことは、次のような認識です。すなわち、「神経活動だけでなく、身体の全体が魂の生命（霊魂生活）の物理的基礎であるということ。そして、私たちが議論してきた人間の身体の3つの要素は、横に並んでいるのではなく、互いの内部に入り込んで存在しているということ」です。ただし、感覚・神経活動の最大の集中は主に「上部人間（頭部）」にあり、リズム活動の最大の集中は主に「中部人間（胸部）」にあり、代謝活動の最大の集中は主に「下部人間（腹部・四肢）」にあるのです。

■ヴィルヘルム・ペリカン
Wilhelm Pelikan
「病気プロセスと薬用植物」
Disease Process and Medicinal Plant

米国ヴァルドルフ教育研究所の
『治療が教育となるとき：人智学医学紀要選集』Vol.3から。

※1970年に、British Homoeopathic Journal（Vol. 59）で
英訳掲載されたもの。
（『Heilpflanzenkunde:
Der Mensch und die Heilpflanzen』からの英訳）

●基本的な視点

人智学的医学の視点から
「病気の本質」と「薬用植物の本質」の関係が考察される。

病気は健康な力のバランス崩壊であり、
人間特有の「三分節の緊張」が崩れたときに現れる。
植物は同じ極性を外的な形態の特性として示すことで、
人間に治療の可能性を提供する。
薬用植物の「異常性」は、元型からの逸脱ではなく、
人間を助けるための創造的偏りである。

この視点は、経験的なマテリア・メディカを超えた、
思考による合理的・本質的な医療物質誌の基礎を築く。

●要点

1. 病気の本質（ゲーテ的洞察）

病気は外部から持ち込まれるものではなく、
健康な有機体の中にすでに存在する力のバランス崩壊である。

・健康とは、多様な力・衝動が調和的に統合された動的平衡。
・病気とは、ある力が優勢になり、他の力が抑圧される「危機」。
発達の過程で古い平衡が崩れ、新しい平衡に向かう過程でもある。
・結果として、内部の不均衡（素因）ができ、
外界の影響（感染など）が二次的に加わる。
・病気は「音楽的な問題」（ノヴァーリス）
――不協和音をより高い調和へ解決するプロセスであり、
進化・浄化の契機となり得る。

2. 人間の三分節構造と病理の元型

人間の有機体は三分節からなり、それぞれが極性的に緊張しながらバランスを取っている：

・神経・感覚系（上部・頭部中心）：

意識・思考のため、生命活動を抑制・硬化させる（麻痺的）。

・代謝・四肢系（下部・腹部中心）：
外界を破壊・消化し、強い生命力を発揮（無意識的）。

・リズムシステム（中部・胸部中心）：
両者の橋渡しをし、健康を維持する。

元型的な病理の極性：

・炎症：
代謝系の過剰 → 溶解・崩壊プロセス（下から上への侵入）。

・腫瘍・硬化：
神経・感覚系の過剰 → 硬化・退行プロセス（上から下への侵入）。

これらはあらゆる器官に現れ得る極性現象である。

3. 植物における「異常」と薬用性

植物にも「溶解（花・果実のプロセス）」と
「硬化（根のプロセス）」の極性が存在するが、
植物では「病気」にならない。

・植物は一つの部分（根・葉・花など）が極端に優勢になり、
元型植物のイメージを歪めることができる。

・この「一面的な偏り・異常性」が、
植物を薬用植物たらしめている。
（例：巨大な根、過剰な花、異様な茎など）
・植物界では、この偏りが創造の原理となり、
多様な形態を生み出している。

・人間界では、同じ原理が
病理（痛み・機能障害）として現れる。

4. 人間と植物の本質的な違い

・植物：
純粋な生命存在。
形態形成の力が外的に自由に流れ、過剰・偏りを形態として表現可能。
神経系・内臓を持たず、病気を「内側」で抱え込まない。

・人間：
植物を超えた存在（魂・精神を内面化）。
形態を早期に固定し、力の偏りを動的・機能的な領域に留める。
そのため、偏りは痛みや病態として経験される。

・動物は多様な「種」として魂の特性を形態に表現するが、

人間は単一の種の中で精神の担い手となる。

5. 治療的関係の核心

植物が人間の病気を癒すのは、元型的な投影関係による：

・植物の「異常な偏り」
（例：根の過剰 → 神経系への薬効、花の過剰 → 代謝系への薬効）は、
人間における対応する病理プロセスを補正・バランス回復する。

・薬用植物は、人間が内面化したものを
「外側に表現」した鏡像として機能する。

・治療とは、病気の「不協和音」をより高い調和へ導くこと。

●本文

人間における病気の本質を真に理解し、それを薬用植物の本質に関する対応する概念と対置させることが必要です。私たちは、薬用植物であるところのものを、単に経験的に特定するだけでなく、思考によって捉えることができるでしょうか。

病気や病理というものは、外部からもたらされた何かに起因すると考えるべきではなく、内側から、すなわち「完全に健康的で正常なもの」の観点から見られ、理解されなければならない――これこそが、ゲーテによって私たちに与えられた、偉大で普遍的な洞察の一つであると見なすことができるでしょう。

あらゆる異常や、あらゆる病気の根源的な可能性となる力や原因は、正常なものの中に探されなければなりません。健康な有機体は、自らを構成し、分化させ、すべての部分を調和的に統合して一つの全体へと作り上げている、多種多様なあらゆる力や衝動との間でバランスを保っています。その結果として、それは自らを取り巻く環境との間でもバランスを保つことができるのです。

私たちが議論しているこの観点に従えば、病気の身体は、健康な有機体とまったく同じ力や衝動を内包しています。ただ、それらの力がもはやバランスを保つことができなくなっているのです。それらは一つの「危機」を迎えており、その危機とは、たとえば「発達の危機」であるかもしれません。

人間に本来備わっている性質と切り離すことのできないプロセスである「発達」とは、ある一つの均衡状態から、新たに達成されるべき次の均衡状態への移行を意味します。より高次の均衡に到達するために、古い平衡状態が放棄されるのです。

それがどのようなものであれ、またその危機がどのような形で現れるにせよ、バランスが崩れることによって、全体の一部の要素が優位に立ち、他の要素が不利益を被ることになります。ある部分は萎縮し、またある部分は過剰に繁茂し、発達するのです。

全体性の現れそのものである「調和」は深く乱され、全体が「傷つき」、病気に陥ります。それは自らの内部で戦っているだけでなく、その平衡の乱れの本質に応じて、外なる世界の力との健康な関係をも、何らかの形で失ってしまうのです。外なる世界の力が強すぎる形で内部へ侵入してくるか、あるいはその力を適切に制御できなくなってしまいます。

こうして、内部の崩壊に対して、外部からのダメージが付け加わることになります。内部の不均衡が「病気への体質」を確定させ、外なる世界が二次的な影響（たとえば、細菌感染の発症など）を引き起こすのです。

ゲーテは、この洞察を人間の病理学に対してはそれ以上発展させませんでしたが、植物の病理学に対しては発展させました。植物における「奇形」の研究は、通常通りに発達した植物と同じ形態形成の力がそこでも働いていること、ただそれらの力が「不適切な場所」または「不適切な時期」に働いているだけであることを彼に示しました。

そして実に、彼にとってそのような奇形は恐忌むべきものではなく、通常は他の力によってバランスが保たれているために知覚できない力を、直接的に知覚できる場所となったのです。今やそれらの力は目標を追い越し、定められた限界を突き破って、目に見えるものとなっています。

このように捉えれば、病理的なものとは、単に記録されるべき説明のつかない事実でもなければ、創造における痛ましい不完全さでもありません。むしろ、健康の本質がはっきりと明らかになる領域であり、私たちがそれを見るときに驚嘆すべきものなのです。

詩人ノヴァーリスの見事なアフォリズムが表現しているように、病気とは「音楽的な問題」となります。それは、それに先立つ調和へと単に逆戻りさせてはならない不協和音であり、その後に続く、より優れた調和へと解消されなければならないものなのです。 病気を適切に経過することは、より優れた健康へとつながります。さらに発達していく存在たちの世界における、病気の概念とその正当性、いやむしろその「必要性」が明らかになり、ここから私たちは「治癒」の概念へと向かって働きかけることができるようになるのです。

しかし、この「病気の概念」が、様々な個々の病気の本質に関する具体的な観念へとつながるのは、それが「三分節の存在としての人間の有機体」という概念と結びつく場合のみです。

この三分節性において、私たちは完全に相反していながらも、互いになくてはならない2つの機能領域（球圏）を持っています。

1）神経・感覚系

感覚器官、そして感覚器官を通じた外部の印象の世界（外界）と出会うように形成されているシステムです。これらに身を委ね、それを感受する魂へと伝えるために、神経・感覚系は「意識」というより高次の生命形態のための空間を作るべく、自らの有機的な生命活動を抑制（抑制・低下）させなければなりません。感覚器官に反映された外界は、知覚と認識を求める探求の対象となります。これらの器官においては、高次の能力の発達を可能にするために、物理的な発達が早い段階で停止（静止）させられなければならないのです。

2）代謝システム（代謝系）

代謝系は、実際に外界（食物など）を摂取しますが、それを消化し、自らを養うように強制します。そのプロセスのなかで外界は破壊され、内なる世界（内界）にならなければなりません。内部に閉じ込められ、それ自体の強力な生命活動で満たされた諸器官が、これを成し遂げます。そして、それらのすべては「無意識」によって覆われているのです。

このような（神経系と代謝系という）極性的な対照を互いに関連づけ、バランスを保つためには中間に位置する「第3のシステム（リズムシステム / 律動系）」が必要です。このシステムを通じて、正反対のものが一つの全体へと統合されます。健康の本質的な存在はここに宿っており、そのリズムが健康を保証しているのです。

神経・感覚系は、人間という全体にとって不可欠なものであるとはいえ、それ自体としては「生命の麻痺」であり、有機体の他の部分にとっては「病気」を象徴しています。なぜなら、意識や思考のために、それは生命活動の「低下、硬化、弱体化」という代償を支払わなければならないからです。

逆に、代謝システムがそれ自体の力だけで作動すると、それもまた「病気」として作用します。なぜなら、代謝系は、魂が眠りにつき、意識が低下した状態においてのみ、その過剰な生命力を発達させることができるからです。

人間における「完全な健康」とは、これら3つのシステムすべてが、正しい相互作用を保っている状態の中にしか存在しません。したがって、健康とは静的なものではなく、動的なものなのです。

人間は、あらゆる点で「不安定なバランス」の中に身を置くように作られています。人間の歩行や直立姿勢は、あたかも象徴のように、このことを外的に表現しています。あらゆる方向に対するこのような不安定さの上にこそ、人間が常にさらなる発達を遂げ続けることができる能力が築かれているのです。

〔炎症と腫瘍の極性〕

リズムシステム（律動系）は、「下部」組織の同化プロセス（組織を構築するプロセス）を「上部」組織へと伝えます。そうすることで、上部組織が有機体全体のなかでその機能を正しい意味で果たすために、どうしても行わなければならない「破壊プロセス」を絶えず相殺し、バランスを保っているのです。

しかしながら、ここでは立ち入ることのできない何らかの理由によって、もし代謝活動が過剰になってしまうと、その結果として「炎症性の溶解プロセス」が引き起こされることがあります。逆に、上部組織が過剰に発達すると、それは「硬化の現象」として現れ、代謝活動の滞留や、過度な組織の退行・劣化をもたらします。

色彩の成立という元型的な現象が、私たちに対して「黄色と青」という一対の極性的な色彩という二重の現象として明かされるのと同じように、有機体そのものの本質に根ざした病気の元型的な現象は、「炎症と腫瘍」「溶解と硬化」という極性の中に現れます。このことは、有機体の全体にも当てはまりますが、個々のあらゆる器官（臓器）にも同様に当てはまります。なぜなら、それぞれの器官は、神経・感覚活動と代謝活動の固有のバランス（均衡）を持っており、これが維持されなければならないからです。

〔植物プロセスにおける「溶解と硬化」〕

植物の生命（植物生活）もまた、いたるところにこれら2つの対立するもの、すなわち「溶解」と「硬化」を内包しています。一方は「根」の活動領域に属し、他方は「花」のプロセスに属しています。そして植物界においても、これら2つの活動は、中間にある実体である「葉の機能」を通じて一つにまとめられ、リズム（律動）へと導かれています。

しかし、植物においてこれら極性の一方が優勢になったとしても、それが植物の「病理的なプロセス（病気）」の発達につながるわけではありません。それどころか、植物の形態の世界においては、これは一つの創造の原理」なのです。

植物の形態の中には、調和のとれた根源的な植物要素が、どちらか一方の極へと「偏っている」ことが一目で明らかなものがあります。すべての植物生命の背後にある精神的現実（霊的現実）である植物の「理念」――ゲーテが自らの『原植物』において把握しようとしたもの――は、多くの植物において、極めて一面的な物理的形態として現れます。

私たちは、葉や花の成長が阻害され、実質的に「根」以外の何物でもないような植物に出会うことがあります。また、根や葉がほとんどない状態で、巨大な「花」を形成するものもあります。あるいは、他のいかなる器官であっても、節度を失って過剰に発達することがあります。たとえば、茎や子葉、あるいは植物全体が圧倒的に「葉」のようになってしまう場合などです。雄しべの発達が、雌しべ（柱頭）を犠牲にした肥大化である場合もありますし、その他にも無数の可能性が存在します。

ルドルフ・シュタイナーは、特に「薬用植物」においては、一つの部分、あるいはプロセスの一部を過剰に発達させ、それを自らの外見における際立った特徴にする傾向があるということを、世界で初めて指摘しました。植物を「薬用植物」たらしめているのは、まさにこの（元型からの）「偏り」なのです。

ある一つの部分がどのようにして全体になろうとし、増殖し、あるいは少なくとも優勢になり、他の部分の成長を阻害して植物の「元型像（archetypal image）」を歪めているか、その様子を非常に明確に観察できることがよくあります。

したがって、この「歪み」がどのようにして生じたのかというプロセスを理解することによって、私たちはその植物が医療においてどのような方向性で役立ち得るのか（治療の方向性）を発見することができるのです。そして、このことの上にこそ、植物に関する「合理的な医療物質誌（materia medica）」の基礎を築くことが可能になるはずです。

ここで、ある一つの部分とその機能がこれほどまでに優勢になり、「元型のイメージが歪められる」というプロセスが、なぜ人間においては「病気」を引き起こすのに、植物においてはそうならないのか、という疑問が生じます。この疑問を追究していくことで、私たちは人間と植物の両方の本質について、いくつかの深い洞察を得ることができます。ここでその主題のすべてに立ち入ることはできませんが、詳細については、ルドルフ・シュタイナーの関連する著作の中に見出すことができます。

植物界においては「歪み」を引き起こし、薬用植物の興味深く個性的な形態を生み出す原理――これと全く同じ原理が、人間の領域においては「病気」を意味することになります。それは人間に新しい形態や新しい人種を生み出すのではなく、病理的な状態を生み出します。それは痛みや生命への脅威を伴うものですが、同時に、内的な発達の促進、浄化、そしてより高次の健康状態の達成をも伴うものです。ここには、全く異なる存在の階層が現れています。

このミステリー（mystery）へと近づくために、次の事実を考慮してみましょう。

植物は真の意味での「臓器の発達」へと進むことはなく、人間に匹敵するような「神経・感覚系」も、必要な内部臓器（肝臓、腎臓、胆嚢など）を備えた「代謝系」も持っていません。人間における病気の「元型的な現象」の源泉である「炎症と腫瘍」は、植物においては流れる（発生する）ことがなく、単に植物の球圏（領域）の外側にあるのです。

人間のシステムの中で、元型的な健康の本質であり、植物の中に完全に反映され、その対応物を持っている唯一のシステムは「リズムシステム（律動系）」です。「葉のシステム」は植物が作り出す唯一の器官形態であり、植物の他のすべての部分もまた、単なる葉（の変容）にすぎません。 植物には脳がなく、目や耳に匹敵するものもなく、いかなる形態の内臓もありません。

人間において真の意味で病気を構成する「存在の状態」――そして、私たちがそれを通じて病気を経験することになる「存在の状態」と結びついていなければならないもの――は、植物の一部になることはできず、永遠にその外側にとどまり続けます。病気とは、人間を真に人間たらしめているもの、すなわち、人間が植物という純粋な生命構造以上の存在であるための「その何か」と結びついているのです。

植物は純粋な生命構造にすぎない（一方で人間はそれ以上の存在である）からこそ、人間においては病理（内的な、魂の形態の変化）であるものを、植物はその「外的な形態の特性」として示すのです。

人間が病気にかかっている状態であるとき、植物は人間のための「薬用植物」となります。そして、植物と人間の間にきわめて普遍的に存在している、あの投影的な元型関係のおかげで、植物は人間に治癒効果をもたらすように使用されることができるのです。最初の章［前回の記事］において私たちは、これら両者の三分節性の中に全く同じように表現されている元型関係を記述しようと試みたのでした。

理解をさらに深めるためには、人間がどのような意味において植物以上の存在であるかを見る必要があります。

自然の創造的な力が植物の元型像に多大な変化をもたらし、ある一つの部分の肥大化が他のすべての部分を圧倒してしまうとき――たとえば、ブリオニア（bryony/ヨウシュカラスウリ）やマンドレイク（mandrake）の巨大で異様な根の形態、シダ植物の葉への一面的な偏り、ニワトコ、ハナヤスリ（アメリカネナシカズラ）、あるいはラフレシアにさえ見られる過剰な花らしさ、トクサの（節だらけの）茎の構造、カボチャの巨大な果実など――が引き起こされたとしても、これらの偏った構造はどれも、それ自体としては完全に健康的なのです。

また、それらの一部が私たちにとってどれほど不格好に見えたとしても、あるいは通常であれば葉や花のために確保されている領域へと根の力が突き進んでいたり、逆に根の領域が花のプロセスで満たされていたり（前者の例はキバナゲンチアナ（yellow gentian）、後者の例はニンジンです）したとしても、これらすべては完全に生存可能であり、それ自体に不快感や痛みをもたらすことは決してありません。

しかし、人間において代謝プロセスが神経・感覚の領域、あるいは脳にまで過剰に侵入してしまうと、これは極めて不快な経験、たとえば「神経炎」や「偏頭痛」などになり得ます。また、骨格系に属する「硬化の衝動）」が血管の内部で働けば、それは最も苦痛に満ちたもの（動脈硬化など）になるでしょう。

人間においては、このような力と力の間の偏りや移行が、新しい身体形態の発達へとつながることはありません。たとえば、巨大な頭を持った人種、樽のような胸を持った人種、肉厚な足や長い腕を持った人種などが誕生することはないのです。せいぜい、その兆候がかすかに現れる程度にとどまります。

人間におけるこのような力のシフトは、完全に「動的な領域」にとどまり、目に見える身体の形態にまでは至りません。

ここから明白になるのは、人間は植物とは異なり、形態を形成する力と物理的な身体との間に、全く異なる関係性を持っているということです。極めて明らかに、人間においては形態形成の力が「異なる方向」へと使用されているため、植物と同じ程度には物理的な形態へと流し込まれない（物質化されない）のです。

植物は、形態を（外側へと）表現することの中に、はるかに強く生きています。植物の形態は決して完成することがなく、絶えず変化し続けます。植物は成長し続ける必要があり、そうでなければそれで死を迎えます。

これに対して人間は、極めて早い段階で形態形成の活動を締めくくり、完成された形態へと到達します。そして、その完成された形態を持ってして、真に自らの（精神的な）存在をスタートさせるのです。

植物はその存在を終えるか、あるいは形態を生み出すことを停止しなければなりません。成長が終焉を迎えるということは、植物が「花のプロセス」に入るときに非常に明確に観察されます。生命力は低下し、生き生きとした緑は消え去り、葉は短命で脆いものとなります。

それと同時に植物は、その上方にある生命の球圏、すなわち「動物の領域」へと、内面的にも外面的にも接触することになります。

外面的には、自らの生命計画の中に特定の動物活動（たとえば、蝶、蜂、アリ、鳥などによる受粉や種子の散布といった形態）を取り込むことによって接触します（花が動物に酷似しているため、特定の蝶がそれを雌の蝶と勘違いしてそのように振る舞う、というラン科の植物も存在します）。しかし、この移行の時点において植物の生命は衰退し、植物はその存在を中断して、再び自らの出発点である「種子」へと収縮していくのです。

動物と人間は、「植物を超えた（植物の向こう側にある）」存在です。彼らは、植物が（自らの身体の）外側に残しておかなければならなかった「その何か」を、自分自身の一部（内面）としました。そのために彼らは、次々と新しい形状を生み出し続ける能力を犠牲にし、そのプロセスを永続的な固定された形態の中で停止させたのです。

しかし、動物たちは依然として「種」を形成する能力を保持しています。全体として見たとき、動物においてはもう一つの存在の領域が依然として流動的なままであり、それが何千もの「種」の発達として表現されています。これに対して、人間にはただ「一つの種」しか存在しません（様々な人種は、単一の人類の種におけるバリエーションにすぎません）。

動物の形態の豊かさの中に表現され、それらの形態にまさに感性的に明らかな形を与えているのは、「本能の持つ創造的な性質」です。ウサギの「恐怖」、子羊の「忍耐」、ナマケモノの「精神的無気力」、オオカミの「強欲」、トラの「激怒」、ライオンの「怒り」――これらは魂の特性（心理的特性）ですが、それらに随伴する身体の形態と不可分に結びついています。動物の身体とは、肉体となった魂の特性のシンボル（象徴）なのです。「魂と身体の一体性」という、よく使われるフレーズに正当性があるとすれば、それはまさにこの点においてです。

人間もまた、自らの内にこれらの魂の力を宿していますが、それらは抑制されており、より高次の原理（自我・精神）によって統治されています。この高次の原理は、一方では奔放な本能の発達を抑え込み、他方ではそれらの本能が身体の形態形成要素へと侵入していくのを防いでいます。

植物における流動的で生き生きとした、形態を生み出す豊かで過剰な力が、引き止められ、単一の永続的な形状へと固定されることによって「動物の形態」が生み出されます。それとまったく同じように、身体を形成する豊かな「魂の本能」が堰き止められ、身体を生じさせるプロセスから遠ざけられる（抑制される）ことによって、「人間の体躯（直立した人間の形態）」が生じるのです。

したがって、人間のこの（肉体の）形態は、特定の魂の特性や衝動を直接表現してはいません。本能的な生命に対して、個々の身体の造形を通じて自らを表現する機会は与えられていないのです。

人間の魂は、魂としての経験が持ちうるすべての可能性を内包しています。同様に、人間の身体もまた、動物界において身体が形成されるすべての具体的なあり方を、一つの「元型的な形態（像）」の中に内包しています。魂の要素の全体を内包しているのは「精神（霊）」です。そして、人間の身体は魂の特性を個別に反映しているのではなく、「精神の担い手（器）」なのです。

しかし、これらの事柄については、ここで極めて簡潔に触れることしかできません。これらについては、精神科学に基づく動物の本質および人間の研究の中で、より詳細に記述されています。

これまで議論してきた内容は、次のように要約することができるでしょう。

人間と植物との間にある完全な投影的（元型的高次）関係――そして何よりも、人間における病気と薬用植物の本質との関係――を捉えるためには、両者が持つ「三分節の極性」を考慮するだけでなく、植物と人間との間にある「本質的な自然（存在階層）の違い」をも評価することが求められます。

双方を構成している構成要素について、少なくとも簡潔にその概要を示さなければなりません。そのための出発点は、私たちがこれまでに歩んできた道のりのいたるところに見出すことができるのです。

■ヴィルヘルム・ペリカン
Wilhelm Pelikan
『薬用植物学概論』①
Grundriss einer Heilpflanzenkunde

（フリードリヒ・フーゼマン 創設
オットー・ヴォルフ による新版編集
『治療芸術の基礎としての人間像
精神科学的に方向づけられた医学試論』第二巻所収）

【1　人間と植物】

〔植物と人間における律動（リズム）系〕
〔根のプロセスと神経・感覚システム〕
〔花・果実のプロセスと新陳代謝システム〕
〔病気のプロセスにおける「理念」と薬用植物の「理念」〕
〔四つの構成体と、それが体現された四つの物質性〕

フリードリヒ・フーゼマン
『治療芸術の基礎としての人間像』第一巻については
すでに紹介したが、そのシリーズは全三巻（電子データでは全四巻）あり、
第二巻以降はかなり専門的でしかも大部なため、現状では紹介の難しいが、
そのなかから、適宜、紹介可能なものをとりあげる。
まず、第二巻に収められている
ヴィルヘルム・ペリカン『薬用植物学概論』から。

●ヴィルヘルム・ペリカン
『薬用植物学概論』
〔contents〕

【1　人間と植物】

〔植物と人間における律動（リズム）系〕
〔根のプロセスと神経・感覚システム〕
〔花・果実のプロセスと新陳代謝システム〕
〔病気のプロセスにおける「理念」と薬用植物の「理念」〕
〔四つの構成体と、それが体現された四つの物質性〕

【2　典型的な薬用植物】

〔シソ科〕
〔セリ科〕
〔キンポウゲ科〕
〔サボテン科〕
〔アカザ科〕
〔ナス科〕

【1　人間と植物】

●基本的な視点

薬用植物学を「植物と人間の本源的関係」の上に置く。

自然を人間の中へ、人間を自然の中へ投影できなければ、
病める人と薬用植物の本質的対応は見えない。

その土台はゲーテの変容論（形態学）で、
シュタイナーが「有機的世界におけるケプラーの法則」と呼んだ生命法則だが、
変容論だけでは足りず、植物と人間の関係全体は
シュタイナーの精神科学によってはじめて体系化される。

進化ではなく「原存在の分極」として両者を捉えるのである。

●要点

・植物と人間のリズム系

葉は節ごとの反復として植物の中間項＝リズム系である。
人間では脊椎・肋骨に支えられた呼吸・循環の中間システムがそれに対応する。
葉緑素（マグネシウム、緑、赤色蛍光）とヘモグロビン（鉄、赤）は
構造が酷似しつつ外見は極性をなし、
光合成（酸素排出・炭酸固定）と人間の呼吸（酸素摂取・炭酸排出）は
「印章と印影」の関係にある。
鉄は植物ではクロロフィルの外に留まり、人間では内部へ同化される。
両者は互いの呼吸圏を供給し合うため、単独では生存できない。
リズムそのものも、さらに両極の真ん中に置かれる。
人間は植物の完全な反転（垂直）、動物は部分的反転（水平）である。

・根のプロセスと神経・感覚系

根は重力圏・鉱物界に属し、
塩と水を選択的に捉え生命化して重力から引き上げる。
人間の頭部・神経感覚系は逆に、有機的なものから生命を奪い、
硬化・塩形成（鉱物化・分解）へ向かう。
根の生薬が頭部領域と関係するのは、この極性のためである。

・花・果実のプロセスと新陳代謝系

葉は宇宙圏に対する「接平面」であり、
植物の代謝の衝動中心は外なる宇宙に残る。
人間は肺・肝・腎・心などを通じて、その中心を内臓として内包する。
花は動物的形態へ手を伸ばし、果実は人間の代謝へ直接同化される。
思考は神経感覚の分解、感情はリズム、意志は代謝に支えられる。
したがって正常な対応は、
根＝頭部・神経感覚、葉＝リズム、花・果実＝代謝・四肢である。

・病気の「理念」と薬用植物の「理念」

病気は外因ではなく、健康な力の内的不均衡（ゲーテ）。
三分節の均衡が崩れると、代謝優勢は炎症・溶解、頭部優勢は滞り、
硬化（腫瘍）という二つの原病態になる。
健康の本質はリズム系の調整にある。
植物でも硬化は根、溶解は花に固有だが、
一方の極が過剰でも病気にはならず、形態の創造原理になる。
（ブリオニアやマンドラゴラの根偏重、ラフレシアの花偏重、
スギナの茎、ウェルウィッチアの子葉、オトギリソウの雄しべ、
カボチャの果実、キナや白樺の樹皮など）。
この「原像の歪み」が薬用植物を正常植物から突出させる。
人間が同じ偏りで病むのは、
エーテル体（形成力）を出生後の完成形態のなかで精神のために犠牲にし、
流動的成長を止めているからである。
植物は形成を止めたとき存在を終える。

・植物は水（流動）を形態の媒体とし、固化は脱生命化の結果である。
空気の内面化はアストラルとともに内臓宇宙をつくり、
熱の内面化（血液、約37℃）は自我の住まい。
植物の同化が最も活発なのも同温度だが、熱の中心は外の太陽に残る。
薬用植物の本質は、地・水・風・火への「異常な関わり方」から読み、
どの構成体に働くかを判断する。
根・葉・花はそれぞれ頭部組織・リズム組織・新陳代謝組織に対応する。

●本文

ここでは、真の意味で合理的と呼ぶにふさわしい、薬用植物学の基本原則をスケッチしていきたい。なぜなら、この学問は植物と人間の間にある「本源的な関係」に基づいているからである。それには、自然を人間の中へ、そして人間を自然の中へと投影することができなければならない。とりわけ、病める人と薬用植物との間にある、真の本質的な特徴を明らかにすることが求められる。

このような試みはどれも、基礎となる定礎として、ゲーテの変容論（形態学）を仰ぎ見ることになるだろう。そこで発見された生命の法則は、いわば「有機的世界におけるケプラーの法則」（R・シュタイナー）である。しかし、ゲーテの変容論がそのままの形で提示されているだけでは、まだ薬用植物学には至らない。そこには、植物と人間の間にある本源的な関係への認識が欠けているからである。その関係性の全体像は、ルドルフ・シュタイナーによって初めて発見され、体系づけられている。

〔植物と人間における律動（リズム）系〕

このような本源的な関係における主要な現象の一つが、植物の呼吸と人間の呼吸との関係であり、それは例えば、葉緑素（クロロフィル）と血液色素（ヘモグロビン）の形成および機能の中に表現されている。地球存在における一つの「本源的極性」が、ここに目に見える形で現れている。植物の本質が最も純粋な形で現れる基本器官は「葉」であるため、植物と人間との間の本源的な関係は、葉を出発点として探求されなければならない。

規則的な反復の中で節から節へと積み重なっていく葉の営みは、その形態自体においてすでに、植物という全体性の中間項、すなわち植物のリズム系として現れている。これに対して、人間の有機体の中間システムを対置させなければならない。人間のこのシステムもまた、解剖学的にはリズムに基づいて分節されたも

の、すなわち脊椎と、そこから生じて規則正しく連続し、胸郭を包み込んでいる肋骨弓に支えられている。昼夜の光のリズムに応じて、植物の呼吸と同化作用（Assimilationsgeschehen）は行われる。これらは、人間の呼吸およびそれに結びついた異化作用（Dissimilationsvorgängen）に対して完全な極性をなしている。これら両方の活動は、液状のものと気状のものの間で展開するが、その方向は正反対である。酸素を吐き出しながら行われる植物の炭酸ガス凝縮プロセス（光合成）に対して、人間の酸素摂取と炭酸ガス排出は、まるで「印章」と「その印影」のような関係で対峙している。

自然現象の真に雄弁なルーン文字（象徴）として、葉緑素はヘモグロビンとその構造において驚くほど酷似している。さらに、両者においてある一つの金属が「呼吸の担い手」となっているが、ただ植物においてはそれがマグネシウムであり、人間においては鉄であるという違いがある。この大きな類似性にもかかわらず、これら2つの呼吸物質は、その外見においてすでに互いに極性をなしている。すなわち、クロロフィルは緑色であり、赤色の蛍光を発する。血液色素（ヘモグロビン）はその逆である。また、鉄の果たす相反する役割も見逃してはならない。植物は葉緑素を形成するために鉄を絶対的に必要とするが、鉄はクロロフィルの外部に留まり、クロロフィルにとっては外的な存在である。これに対して人間は、鉄を自らの内部へと同化する。

したがって、植物と人間の呼吸機能における葉緑素と血液色素は、これら両方の存在領域の間にある、本物の本源的関係の「原現象」なのである。それは同時に、この極性的な対立の背景には隠された統一性があり、これが本物の「分極」を表しているに違いないということを示している。この洞察は、広範囲に及ぶ結論を我々に迫る。なぜなら、より高度に発達した存在である人間が、低次の発達段階である植物的存在から徐々に進化してきたはずはなく、ある「原存在」が「分極」することによって植物的な存在形態を切り離し、それによって人間的な形態を解き放ったということを、この洞察が物語っているからである。この両者は、互いに切り離して考えることすらできない。なぜなら、両者は完全に依存し合っており、単独では生存不可能だからである。植物の呼吸する空気は人間（および動物）の領域から生じなければならず、その逆もまた然りである。ここにあるのは、相互に条件付け合う2つの存在形態である。一方の存在だけでは、自らの生命を維持する呼吸圏をただ消耗しつくし、それによって自らを急速に破壊するだけであり、それを自ら創り出すことはできないのである。

しかし、植物と人間がそれぞれの「リズム系」において完全な極性をなしているというだけではない。これら両方の存在領域（植物界と人間界）において、リズムという要素そのものが、さらに「2つの極性的な対立物の真ん中」に置かれているのである。ここで動物を人間や植物と同列に扱うことはできない。なぜなら、人間と植物はその形態のモチーフとして「垂直」を選び取っているのに対し、動物は「水平（」を選び取っているからである。それに対して人間は、植物を完全に反転させた存在であり、他方、動物はこの反転を部分的にしか行っていません。

人間において、この呼吸と血液の活動を伴う「リズム系」は、一方の「頭部、およびそこに集中しつつも全身に及んでいる神経・感覚系の領域」と、他方の「下腹部で優勢でありながらも肉体全体を貫いている新陳代謝系（この後者には、四肢の活動も有機的に含めなければならない）」の間に挟まれている。この「人間と植物の三分節」への認識は、精神科学的（人智学的）人間学の揺るぎない基礎である（第1巻・第3章、および第2分冊の「心臓」の章を参照）。植物においては、「葉のプロセス」が、根の領域と花の領域の中間項として位置している。人間と植物の形態におけるこの三層構造は、それらが互いにどのような関係にあるのかを探求することを我々に要求しているのである。

〔根のプロセスと神経・感覚システム〕

植物は根を通じて、地球とその力の領域（重力圏）に所属している。同時に植物はこの器官を通じて、自らの下にある無機の自然界、すなわち鉱物世界と向き合っている。根は地球に感受性（向地性）を持ち、地上茎は宇宙に感受性（向光性）を持っている。しかしそれだけでなく、根は土壌の物質、すなわち水や塩類に対しても受容力を備えている。根はこれらを単に「知覚」するだけでなく、能動的な成長によってそれら

を捉え、そこにおいて極めて特異な「選択能力」を発揮する。その結果、ある植物種は土壌からある特定の物質を選び出し、別の植物種はべつの物質を選び出して、それらに再び生命を吹き込みながら新たに結合させるのである。（この生命化された結合に対して、灰分分析（燃焼後の灰の分析）は単に死んだ刻印を提示するにすぎない。）吸収された塩類と水は、こうして生命化され、それによって重力や鉱物的な地球の法則性から引き揚げられる。このようにして、微細な「塩プロセス」が植物を貫き、植物を地球の存在たらしめている。

しかし、人間は植物のように鉱物世界に対して外的な関係を持つのではなく、内的な関係を持っている。これらの関係は、私たちが呼吸のところで見たのと同様に、対応する植物のプロセスの「裏返し」となっている。植物の根においては鉱物的なものが生命化へと駆り立てられるのに対し、人間の頭部と神経・感覚プロセスは、有機的なものから生命を奪い（脱生命化）、それを微細な方法で鉱物化へと追いやる。頭部は肉体の中で最も硬化した部分であり、頭部と神経活動からは、固定化プロセスや塩形成プロセス（沈殿・結晶化）が発している。植物が根の力を借りて行う、無意識の「知覚、選択、生命化、構築（同化）」に対して、人間の主体的で意識的な存在（「自我」と「アストラル体」）が作動させる「鉱物化」と「分解（異化）」が対置されているのである。

頭部や神経・感覚プロセスと明確な関連性を持つ、数多くの「根の生薬」は、植物の下部極（根）と人間の上部極（頭部）との間に横たわる、この深い関係性を証明している。

〔花・果実のプロセスと新陳代謝システム〕

性器官との結びつきを見ただけでも、植物の上部（花や果実）を人間の下腹部の器官（生殖・代謝器官）に対応させることは容易に理解できる。しかし、このことは新陳代謝領域の全体に対して、さらに包括的に当てはまる。ただし、この結びつきがどのように成り立っているのかを正確に見極めなければならない。植物は世界（宇宙）に向かって開かれた存在であり、そのことはすでに植物の主要器官（葉）の形態と機能がはっきりと示している。葉とは、理念的には、その葉に属している無限に大きな球体（宇宙圏）に対する一つの「接平面」なのである。この宇宙的な周辺世界から、植物の新陳代謝プロセスを条件づけ、影響を与え、秩序づける活動や作用が放射状に流れ込んでくる。この宇宙的出来事の結果が、植物の中で物質化されるのであるが、そのプロセスの衝動の中心は、外なる宇宙空間に留まったままである。

これに対して人間は、そしてある程度までは動物も、自分の新陳代謝という内臓世界の中に、これらの「衝動の中心」を自らの中に内包している（第1巻参照）。肺、肝臓、腎臓、心臓、胆嚢などは、人間の全体存在と協働しながら、自律的に活動を行っている。これらは、植物であれば「全宇宙のプロセスとの結びつき」においてのみ遂行できるような活動である。例えば、炭水化物の合成と分解は、植物においては太陽と地球のリズムに従っているが、人間においては、その有機体の中で働く「意志の衝動」に従って形成されるのである。

花の領域（花部）において、植物の形態は、蝶形花、仮面状花、唇形花などを咲かせながら、動物の姿へと向かって手を伸ばしている。そして果実形成において、植物は栄養物質として、人間の新陳代謝の中へと直接的に同化していく。

第1巻の第3章では、人間の組織の三分節が、人間の魂の能力の開花とどのように結びついているかを示した。ここでそれを思い起こし、簡単に述べるに留めるが、意識的な思考の能力は神経・感覚システムにおける有機的な分解・脱生命化プロセスに支えられ、「魂的な感情」の能力は中間組織における多様なリズム活動に支えられ、そして意志の能力は新陳代謝プロセスに支えられている。

※図1

ここまでに記述してきたことから、植物の根は人間の頭部および神経・感覚システムと、葉はリズムシステムと、花や果実は新陳代謝・四肢システムと関係していることが導き出される。これは「正常な」植物と、健康な人間において成り立つことである。しかし、私たちは「病める人間」と「薬用植物」との間の関係をも見出さなければならない。後者（薬用植物）は、自らの内に、それらを「正常な」植物の列から突出させる何か「異常なもの」を宿しているのである。

〔病気のプロセスにおける「理念」と薬用植物の「理念」〕

ゲーテが世界に授けた偉大な洞察の一つとして、私たちは「病気は外的な原因に帰せられるべきではなく、健康な状態から理解されなければならない、すなわち内的な原因を持つ」という事実を評価することができる。健康な有機体は、それ自体、およびそのすべての構成部分と均衡（を保っている。それゆえ、その有機体は自分を取り巻く外の世界とも調和している。このような観察法に従えば、病める有機体もまた、健康な有機体と全く同じ力と衝動を自らの内に含んでいる。ただし、それらの力がもはや相互に均衡を保てなくなっているのである。

この調和が揺らぐことによって、そのような全体性のうちのある特定の部分が優遇され、他の部分が不利益を被る。不利益を被った部分は萎縮し、優遇された部分は過剰に展開する。内的な均衡が失われることで、外の世界との均衡もまた失われる。外界の力が強すぎるほどに押し寄せてくるか、あるいは外界の力を十分に捉えることができなくなる。そうして、内部の秩序の乱れに加えて、外部からの侵害が加わることになる。前者のケースには「病気の体質」を、後者のケースにはその二次的な随伴現象、例えば細菌感染などを探求しなければならない（第2分冊の「感染症」の章を参照）。

人間の有機体の三分節という理念において、このような分節された全体性が、そのすべての極性と均衡とともに生き生きと描き出される。神経・感覚システムは人間全体にとって不可欠なものであるが、それが「意識の器官」として機能するためには、それ自体の有機的な生命力を弱めなければならない。これは「分解」と「硬化」によって行われるが、これらのプロセスは有機体の他の部分にとっては「病気」を意味するため、他の部分から生じる調整プロセスによって常に修復されなければならない。

これとは対照的に、新陳代謝システムが単独で働いた場合もまた病気を引き起こす。なぜなら、その強力な「構築プロセス」においては、その過剰な生命力を、意識の混濁の中でしか展開できないからである。リズムシステムはこれら両極を調整するものであり、根本的に、このシステムの中に「健康の本質」が宿っている（「第2の生命周期」の章を参照）。したがって、これら3つのシステムすべての調和ある協働の上に初めて、人間の完全な健康が成り立つのである。

直立した姿勢や人間の歩行がそうであるように、この三分節システムの均衡もまた、極めて不安定なものである。しかし、だからこそあらゆる方向に対して、新しい均衡を獲得するためにいつでも古い均衡を犠牲にすることができるような、「発展していく存在」であるための可能性がここに根ざしているのである（それゆえ、それぞれの年齢層には、それぞれ異なる健康状態が存在する）。

このような「病気の理念」は、2つの極性的な「原病態」へと私たちを導く。下部組織（代謝系）が強くなりすぎると、溶解・融解プロセスを伴う「炎症性・発熱性の状態」として現れることがある。上部組織（頭部・神経系）が優勢になりすぎると、新陳代謝活動の滞り、過剰な分解、そして「硬化」となって表現される。「炎症（Entzündung）」と「腫瘍（Geschwulst / 硬化）」は、人間の有機体の本質そのものに根ざした、病気の「原現象」なのである（「炎症と硬化」の章を参照）。

植物の存在もまた、この「溶解（流動化）」と「硬化」という対立に満ちている。硬化は「根の活動」に固有のものであり、溶解は「花のプロセス」に固有のものである。

葉の活動は、中間システム（リズム系）においてこれら両極（硬化と溶解）の対立をリズム化している。しかし、どちらか一方の極性が優勢になったとしても、それは植物界において病気という現象の原因にはならず、むしろ植物形態の世界における「創造的な形成原理」として現れる。

例えば、一方の極性が偏って発達した結果、葉や花の形成は退化し、ほとんど「根」だけになってしまったような植物が生まれる。その例として、ブリオニア（ウリ科の植物）やマンドラゴラ（マンドレイク）が挙げられる。これとは対照的に、根や葉をほとんど持たず、巨大な「花」だけを形成する植物もある。ラフレシアや熱帯のヤッコソウ（キノコ状の花を咲かせる寄生植物）などである。あるいは、スギナ（エキセタム）のように、茎などの他の器官が度を越えて発達するものもある。また、南アフリカのウォルビス湾に自生するウェルウィッチア（奇想天外）には、子葉だけが優位に支配的であり続ける現象が見られる。オトギリソウ（ヒペリカム）属の植物では、雄しべの過剰な発達が見られ、そこでは花の形態が無数のおしべによって模倣されている。カボチャやメロンのように、巨大な「果実」へと肥大する植物もあれば、シダ類やブリオフィルム（ハカランダ／マザーリーフ）のように、全体が「葉」のようになってしまうものもある。さらに、いくつかの樹木、例えばキナの木や白樺などでは、「樹皮」の形成が優勢になっているのを観察できる。

このように、根源的なイメージが歪められ、一つの器官や部分的なプロセスが過剰に強調されて発達していく傾向、これこそがまさに「正常な」植物を「薬用植物」へと仕立て上げるものなのである。このことを明確に認識しなければならない。植物がどのような方向において薬用植物になり得るか、その方向性を発見することの上に、真に合理的な薬用植物学の可能性が築かれる。

しかし、なぜ人間は「原像の歪み」によって病気になるのに、植物は病気にならないのだろうか？ なぜこの「歪みの原理」が、植物界においては奇妙ではあっても徹底的に健康な形態を次々と生み出すのに、人間においては病理的な状態を引き起こし、頭でっかちや樽のような胸の人、太い足や異常に長い腕を持った人間の一族などを生み出さないのだろうか？ なぜ人間は、そのような偏った傾向を、自らの存在を脅かすものとして「不快」や「痛み」をもって体験するのだろうか？

人間が病気になる可能性は、人間の精神活動および魂の活動の中に潜んでいる。人間は、自らの「形成力」に対して、植物とは全く異なる関係を持っているのである。人間のエーテル体（形成力体）は、明らかに植物とは別の側面から拘束されており、限界のない、常に働き続ける成長の中で自己を使い果たすことはない。植物は自らの形成を常に流動的なプロセスの中に置いている。成長にストップがかけられたとき、植物としての存在は終わりを迎える。これに対して人間は、出生の時点で完成された形態をもって一つの発達プロセスを締めくくり、そこから初めて「人間としての存在形態」を開始する。しかし植物は、カタチづくることを止めたときにその存在を終えるのである。この流動的な生命力（形態の力）は、人間においては「より高次の原理（精神）」のために犠牲にされ、精神の領域へと移し替えられている。したがって、提起されたこれらの問いを解決するためには、植物と人間との間の根本的な違いを注視しなければならない。

〔四つの構成体と、それが体現された四つの物質性〕

第1巻の第1章では、鉱物、植物、動物、そして人間の本質が記述された。要約すれば、人間は3つの自然界に囲まれており、その中心で「地球における第4の存在」を形作っている。人間は、これら3つの自然界と最も親密な関係によって結ばれている。無生の鉱物世界は、人間の肉体の中に見出されるすべての物質を含んでいる。形成力（生命力）の世界は、植物と同様に人間にも関与している。動物と同様に、人間にも魂の性質（アストラル性）が備わっている。しかし、人間が完全な意味で「人間」であるのは、自分自身を「精神（Geist）」として自覚することによって初めて可能となるのである。

人間は他の自然界の真ん中に立ち、さらにそれらを自らの内に内面化している。

薬用植物から「治療薬」へと進めようとするならば、これら治療薬はもはや生きている植物の自然そのものではなく、そこから抽出・獲得された「物質」であるということを考慮しなければならない。したがって、

私たちは「物質」と「それを形成したプロセス」との関係（しかしこのプロセスとは、究極的には「構成体」の活動であり、それに対応する宇宙圏の活動である）について知らなければならない。このような物質的なものと構成体の世界との間の本源的な関係は、ルドルフ・シュタイナーによって明らかにされ、第1巻の第2章において詳細に記述されている。

鉱物は、その物質においては死んだ物理的物質であり、固体という状態の中に、自らの本質を表現するためのもっとも純粋な可能性を見出す。

これに対して植物は、自らを物質化するために、もう一つの別の元素である「流動的なもの（水・液状のもの）」を必要とする。なぜなら植物は、物理的なものだけでなく、エーテル的なもの（生命力）をも物質化させなければならないからである。植物の形態は、そこを満たしている物質の物理的構造から生じるのではなく、そのエーテル的な本質から生じる。植物は自らの本質を、不変で永続的な形態の中に刻印するのではなく、絶えざる「変容」の中に刻印する。メタモルフォーゼの法則を伴うこの流動的な形態の変化には、形を受け入れる準備ができていると同時に、エーテル体の生命原則がそれを要求したときには、即座に、かつ何の抵抗もなくその形を手放すことができるような流動性が必要なのである。植物において、固体はそれ自体から形を生み出すのではなく、単にその生命の形態を「保存する容器」となるにすぎない。植物が真に固化するとき、それは事前に脱生命化プロセスを実行したということであり、自らの肉体の物質から生命、そしてそれと同時に「水」を引き抜いたか、あるいは休止状態に置いたということである。木質化、樹皮の形成、そして種子の形成などがその例である。

動物になって初めて、独自の呼吸器系を通じて、「ガス状のもの、空気のようなもの（気体）」を自らの肉体へと取り込み、すなわち「空気組織」を形成することに成功する（第1巻参照）。この組織化は、下等動物から高等動物へと段階的に上昇しながら、より完全なものへと向かっていくが、それがもっとも完全な形に達するのは人間においてである。この「空気を同化するプロセス」の最も重要な側面は、空気のようなものと同時に、魂的なもの、すなわちアストラル体が体内へと侵入してくるという点である。これによって、内部器官を備えた肉体、すなわち、植物にとっては外なる宇宙が担っていた活動を内側から引き受ける「内臓宇宙」が形成される。魂を宿した生物の呼吸の中で初めて、空気の本質が完全に現れるのである。そしてその空気は、言語の音声という「空気の形態」の中に最高の形と刻印を与えられ、それによって同時に、魂の内面のもっとも完全な物理的表出となる。

「熱」を組織化された元素として自らの支配下に置くことは、独自の空気有機体を持つこと以上に、植物には拒まれている。植物はそれぞれの種類に応じて、あれこれの熱環境や気候帯を自ら探し求めはするが、熱の衝動の中心は、常に太陽として「世界の彼方」に留まったままである。哺乳類に至るまでの下等動物もまた、外部の熱環境によって支配されている（変温動物）。人間だけが、これらの外的な依存関係から自らを引き揚げる。人間は、独自の「内なる熱有機体」を形成したのである（第1巻参照）。それゆえ人間は、その場所の熱環境がどのような状態であろうとも、地球上のあらゆる場所に居住する能力を持っている。人間は「火」を内面的に自らの支配下に置いた。だからこそ人間は、地球上の存在の中で唯一、火を外面的にも支配しているのである。熱の力によって、人間は物質のあらゆる地球的状態を支配し、物質を意のままに形作り、変形させることができる。

熱的なものとの結合の中に、人間の精神、すなわち「自我」は、物質的な肉体の中に住まう可能性を見出し、熱が物質的に空気や水や固体を支配できるように、すべての状態と構成体を支配する可能性を見出すのである（第1巻参照）。これによって「自我」は、地球世界の力と法則によってもたらされる不自由さと束縛から自らを引き揚げる。なぜなら、熱の中には、それらを克服するための力が生きているからである。人間において、この熱は「血液のプロセス」によって担われている。

この論文の第一部で強く強調された、「血液色素（ヘモグロビン）」と「葉緑素（クロロフィル）」との対比は、人間の「自我」と植物の「精神性（霊性）」を求めるべき方向が正反対であることへの暗示でもある。それはまさに、両者の熱インパルスの中心がどこにあるかという点において顕著である。（人間の血液

プロセスが、約37℃という温度を頑なに維持し続けるのはそのためである。一方、植物の同化作用は外部の熱条件に従わなければならないが、それがもっとも活発に行われるのは、奇しくも同じ約37℃においてである。）そして、熱の最高形態とは、人間の「意志」の中に生きている「情熱（感激・インスピレーション）の炎」なのである。

最後に、4つの自然界の「4つの構成体」と、それらが物質化するために用いる「元素」について、これまでスケッチ風に述べてきたことを一つの図表にまとめる。これは、ここから始まる各論（各植物の具体的な解説）において重要となる。なぜなら、植物が「固体のもの（地）」「流動的なもの（水）」「空気のようなもの（風）」「熱的なもの（火）」に対して、どのように「異常な（特異な）形」で関わっているかによって、その薬用植物としての本質について最も重要な手がかりが得られ、また、それらが人間のどの構成体に具体的に影響を与えることができるのかを認識できるようになるからである。

※図表 1 （以下、図表の訳）

〔Mineral〕鉱物
Physischer Leib 物理体
fest 固体

〔Pflanze〕植物
Phys. Leib, Atherleib 物理体、エーテル体
fest, flüssig 固体、流体（水）

〔Tier〕動物
Phys. Leib, Atherleib, Astralleib 物理体、エーテル体、アストラル体
fest, flüssig, luftartig 固体、流体、気体

〔Mensch〕人間
Phys. Leib, Atherleib, Astralleib, Ich 物理体、エーテル体、アストラル体、自我
fest, flüssig, luftartig, wärmehaft 固体、流体、気体、熱

Wurzel 根
Blatt 葉
Blüte 花

Hauptes-organisation　頭部組織
Rhythmische Organisation　リズム組織
Stoffwechsel-organisation　新陳代謝組織

【2　典型的な薬用植物】

〔シソ科〕
〔セリ科〕

●基本的な視点

薬用植物の科を「熱・空気・水・固体（地）」の四要素と、
錬金術的な硫黄・水銀・塩のプロセスに対応づけ、
その形態・芳香・成分の偏りから人間有機体への作用を読む

シソ科は熱（硫黄プロセス）の極端な表現、
セリ科は空気（水銀プロセス）の極端な表現として置かれている。

植物の科は、宇宙的・地上的な諸力のどれが優勢かによって類型化できる。

シソ科は熱と空気が植物全体を貫き、
水分を克服して精油（芳香）を葉の領域にまで押し広げた「熱の担い手」である。

セリ科は葉の細分化と中空の器官を通じて空気を異常なまでに内部へ取り込み、
アストラル的なものを植物の中へ引き込む。

治療の着眼は、人間の自我組織・アストラル体・エーテル体・流体組織が、
これらのプロセスのどこで弱まり、過剰になり、
または関係を乱しているか、にある。

・対応の骨格

熱（火）―硫黄プロセス―シソ科
空気（風）―水銀プロセス―セリ科（およびキンポウゲ科）
水―塩プロセス―サボテン科・アカザ科

地（固体）は、ここでは中心的な薬用タイプとしては展開されない

アカザ科は栄養・食事療法向きで、典型的薬用植物としては短く扱われる。

●要点

〔シソ科〕

茎は四角形、葉はしわ寄り・しばしば乾燥気味で、芳香の精油が葉まで及ぶ。
精油は揮発性で、脂肪油に比べ水素が濃く、熱の段階の上昇を示す。
地中海性・夏の開花・乾燥温暖な土壌を好み、蜜を作りミツバチと結びつく。
肉厚な果実は結ばず、小さく乾いた堅果になる。
栄養物質の蓄積より、香辛・薬効の方向が強い。

作用の中心は、人間の熱プロセスの支持である。
熱プロセスは自我組織と密接で、
有機体の「通気（呼吸が隅々まで行き渡ること）」の基礎でもある。

したがって、冷え・カタル・熱プロセスの弱さ
（例：若い女性の月経困難）が適応の方向になる。

個々の植物は、この熱の優位の中での微妙な偏りとしてとらえられる。

・ローズマリー：
収縮と芳香化の極限。
精油は水素含有が高く極めて揮発性で、麻痺ではなく覚醒に働く。
花のプロセスが葉序に引き込まれる。
煎じは皮膚・慢性胃カタル・月経障害・病後衰弱・肝に。
シュタイナー指示の乳化精油による浴・注射は、
自我が身体に十分参入できない状態
（消耗、糖尿病素因、純粋に魂的な自我の弱さ）に向けられる。
浴は内部を温め軽く興奮させるので、遅い時間は避ける。

・メリッサ：
水的・造形的なものがやや強く、レモン様の穏やかな芳香。
通気を整え、水組織と空気組織の関係を正す。
女性・子どもに向き、軽度の胃腸障害、鼓腸、月経不順、帯下、
それに伴う神経性症状、痙攣性の咳に。

・タイム：
小型のローズマリーに近いが、花は茎頂に分離。
香りは重く、チモールを析出。
リズム系（胸部）の内通気を促し、くる病・滲出性体質・咳・百日咳に。
甲状腺毒症ではヨード様作用のため禁忌。

・セージ：
葉が広がり水・陰への親和が増すが、熱との関係は保つ。
精油に加えタンニン形成が重要。
発汗の調節、結核の寝汗、断乳、口腔のうがい。

・マジョラム：
葉的なものが熱の圏へ引き上げられ、先端に蜂の巣状の花序。
下部の冷えによる月経・子宮・消化の不調。

・ウッド・セージ（テウクリウム）：
森の陰湿へ入り、下方はタンニン・苦味で水の上昇を抑え、
上方は光と熱を取り込む。
肺・気管支カタル、結核傾向、小児の反復熱。
シュタイナーは子宮のバランス調整の特効薬とした。

・ペパーミント：
メントールによる冷涼感が、燃える芳香の後に来る特殊なニュアンス。

・カキドオシ：
春の水的プロセスと大地へ引きずり込まれたシソ科。
匍匐し、葉と花がリズムを刻む。通気不足に由来する内臓カタル、結核素因。
「春のテウクリウム」。

〔セリ科〕

最大の特徴は、葉の造形が全縁から微細な羽状分裂まで極端に変化し、
光と空気の中へ溶けていくこと。

根の収縮（シストーレ）で宇宙的なものを地球極まで吸い込み、
翌年の拡張（ディアストーレ）で
中空の茎・放射状の散形花序・平らな花・乾いた果実へ解き放つ。

中空の茎・葉柄・果実・根茎・袋状葉鞘によって空気を組織に組み込む。

通常の植物の造形力が担うのは固体と液体だけであり、
独自の空気組織は魂を持つ生物のものである、という前提から、
セリ科はアストラル圏を内側へ同化しようとする、ととらえられる。

下部からはガム・粘液が出て、芳香と結びガム樹脂になる。
この過剰な内化から毒も生じる。毒素はアストラル体を備えた生物に働き、
アストラル体と他の構成要素の関係を調整する治療に使える。

・適応の三方向

1）腺組織：
　消化腺・乳腺などの分泌を促進（種によっては抑制）。
　腺はエーテル体の器官でありながらアストラル体に捉えられ、分泌と分解を行う。

2）流体有機体へのアストラル体の介入：
　分泌・利尿・発汗・去痰を促す。

3）空気組織：
　腸のガス停滞、呼吸・循環の痙攣（喘息、てんかん様痙攣、百日咳、狭心症）。
　痛みはアストラル体の体験なので、鎮痛とも結びつく。

個々の植物は、空気化の強さと、水・塩・光・ケイ酸との関係の差として描かれる。

・ドクゼリ：
空気が水に勝ち、根茎まで気室化する。
中毒像（めまい、嗜眠、散瞳、痙攣など）から、顎痙攣・強直性痙攣・
狭心症・百日咳・痛風・リウマチ・癌性疼痛の方向。

・セロリ：
塩生植物でもあり、塩分の高い灰。消化腺を刺激し、
膀胱・腎・結石・痛風・リウマチ。

・サニクル：
空気の浸透が和らぎ、掌状の丸葉。
石灰・ケイ酸・サポニン・精油・樹脂・タンニン。
傷の清浄・止血・内出血、胃腸の炎症。抗痙攣・腺刺激は後退。

・ニンジン：
科の調和的中心。
カロテンは「光の物質」で、
体内でビタミンAとなり感覚圏・外胚葉、とくに眼と結びつく。
灰はケイ酸と鉄。
子どもの感覚圏と秩序ある成長、駆虫。
果実は通経・利尿。

・キャラウェイ：
ケイ酸・鉄・マンガン。
消化管でのアストラルの弛緩とエーテルのアトニー、
駆風・通経・胃と子宮の痙攣。

・アニス：
同年内に収縮から拡張へ。
微細な鉄・塩プロセスが動的。
抗痙攣・駆風が強く、軽い麻酔的ニュアンス、鎮咳・去痰・喘息。

・フェンネル：
空気性の極。
空気組織と腺（流体の強壮）がともに高まる。
去痰、乳児の鼓腸、ケイ酸と結びついた眼への作用。

・ドクニンジン：
アストラル原理がエーテル造形力を圧倒し、物理領域へ侵入。
乳汁様の液、コニイン。
腺活動・乳汁を抑制し、潰瘍・硬化・腫瘍を軟化、強い鎮痛。
興奮の鎮静、喘息・百日咳・てんかん・舞踏病など。
致死量でも意識と心臓は最後まで保たれる、
という古典的描写（ソクラテス）が引かれる。

・ラベージ：
開花後も根に生命を残す。
利尿、心臓性水腫、膀胱炎、蛋白尿、痛風、月経閉止。
耳では、空気器官であるべき中耳でエーテル過程が過剰なときの中耳炎。

・アンジェリカ：
科の最も完全な代表の一つ。
繊細な芳香は、空気の中へ洗練された流体。
腺の腫脹・炎症・硬化、とくに頭頸部とアデノイド体質の子ども。
アストラルなものが頭部から代謝へ下降できない、
または頭部へ突き戻される状態への対応。

●本文

【2　典型的な薬用植物】

　これまで述べてきた「熱・空気・水・固体（地）」という4つの状態および物質性の働きは、いくつかの植物の科において、極めて明瞭かつ極端な形で表現されている。全体の概要を把握しやすくするために、ここにすでに短いまとめを提示しておく。

　熱（火）― 硫黄プロセス ―シソ科（Labiaten / ラビアテン）

　空気（風）― 水銀プロセス ― セリ科（Umbelliferen） / キンポウゲ科（Ranunkulazeen）

　水 ― 塩プロセス ―サボテン科（Kakteen） / アカザ科（Chenopodiazeen）

　地球（地）

　アカザ科の植物は典型的な薬用植物ではなく、むしろ食事療法用や通常の食物（例：ホウレンソウやビーツなど）として役立つものであるため、ここでは短く扱うに留める。これに対して、「熱（火）」と深い親和性を持つシソ科（ラビアテン）は、典型的な薬用植物としての性質を十分に備えている。

〔シソ科（Lippenblütler）〕

　私たちの身近にある薬草（ハーブ）の多くが、このシソ科（唇形花科）に属している。セージ（サルビア）、タイム、ラベンダー、マジョラム、メリッサ（レモンバーム）、ローズマリー、ニガクサ（テウクリウム）などである。その大部分は、外見的には目立たない草木である。注目すべきなのは、すべてのシソ科植物において「茎が四角形」であり、「葉にはしわ」があり、多くの場合まるで乾燥しきっているかのように見える点である。

　シソ科のあらゆる特性は、彼らが非常に強力な「空気および熱のプロセス」によって、「水（流動性）の要素」を克服していることを示している。この熱と空気のプロセスが彼らの本質を決定づけている。しかもそれは、他の植物の科のように「花」の領域だけに限定されず、根に至るまで植物全体を貫いている。その結果、葉はどこか花のようなキャラクターを帯びるようになり、シソ科に特徴的な芳香を与え、まさに「治癒の原理（薬効成分）」そのものである「エッセンシャルオイル（精油）」の担い手となる。精油は揮発性（空気の性質）であり、脂肪油と比較すると、水素の濃縮によって生じる「熱の段階の上昇」を意味している。

　これらの薬草が発達するためには、太陽の熱が不可欠である。彼らは太陽熱を喜んで受け入れ、それによって自らの全形態を貫く。それゆえ、彼らは文字通り、真の意味での「熱の担い手」となるのである。

　このことによって、彼らの治療への応用に関する本質的な事柄はすでに語られたことになる。すなわち、シソ科の植物は、人間の有機体において「熱プロセス」をサポートするのである。この熱プロセスは、一方では人間の「自我組織（ Ich-Organisation ）」と特に親密に結びついており、他方では、有機体が「呼吸で満たされること（Durchatmung）」の基礎を形成している。

　したがって、シソ科植物は、「身体の温め（通熱）」や「呼吸（通気）」が損なわれている場所（例えば寒さによる侵襲など）や、カタル（炎症・粘膜の滲出）が存在する場所、あるいは、有機体の発達において熱プロセスが弱すぎることが判明している場所（例えば、若い女性の月経困難症など）において、どこでも治療薬として考慮に値する。

シソ科のタイプにおいて特徴的なのは、宇宙的な「熱の活動」を強力に自らの中へと吸い込むプロセスの優勢である。これに対して、地球や水から植物へと流れ込んでくる力は、縮小し、乏しくなっている。この植物グループは、まるで「内なる火」によって支配されているかのようであり、その火が植物の肉体を乾燥させ、その形態を鋭く研ぎ澄ませている。その結果、ローズマリーやタイムにおいて特に特徴的な形で観察できるように、葉は小さく、針のようになっていく。この「内なる火」の働きにより、通常であれば花や果実の器官でしか起こらないはずの「植物全体が強力にスパイス化され、芳香化される」という現象が引き起こされる。その一方で、みずみずしく肉厚なものを形成しようとする傾向は後退することになるのである。

乏し形成され、茎に厳格に保持された葉の営みの上に、豊かな花が咲き乱れる。これがこのダイナミズムがもたらす結果であり、これほど多様な薬用植物や香実（スパイス）植物を生み出す植物の科は、他にはほとんど類を見ない。しかしその一方で、このダイナミズムは、食用植物に特徴的な物質（炭水化物やタンパク質など）を強力に蓄積することを不可能にしている。それゆえ、シソ科植物は肉厚でみずみずしい果実を結ぶことはなく、油分に満ちた、小さく乾燥した堅果（ナッツ状の種子）を形成するのである。

このような本質的な性質に対応して、シソ科植物は乾燥した温暖な土壌を好む。実際、シソ科植物はすべて地中海地方を故郷としており、真夏の時期に豊かに開花する。また、シソ科植物には「蜜」を形成する性質もあるが、これは「熱の動物」であるミツバチによって何よりも重宝される。周知の通り、ミツバチの身体はその花の形態に適応している。

ローズマリーは、シソ科植物の本質を最も際立った形で表現している。ローズマリーは、葉に現れる「収縮」の傾向と、植物全体を「芳香化」するプロセスを、最も極限まで押し進めた植物である。そのため、その葉はまるで「針（松葉など）」のように見え、植物に含まれるエッセンシャルオイル（精油）の含有量は、他のどのシソ科植物よりも高いだけでなく、この精油はあらゆるエッセンシャルオイルの中で最も高い水素含有量を持ち、極めて揮発性に富んでいる。その香りは心地よくスパイシーであり、人を麻痺させるのではなく、覚醒させるように作用する。

花のプロセスは、葉の領域へと強力に引き込まれている。つまり、花は独立した花序として分離して先端だけに咲くのではなく、リズムをもって幾層にも重なり合った葉の配列（葉序）に伴って、繰り返し一緒に現れるのである。

民間療法において、ローズマリーは今日でもなお、葉の煎じ薬（お茶）の形で、皮膚の疾患、慢性の胃カタル、そして月経障害に対してしばしば用いられている。また、チフス、発熱、インフルエンザの後の消耗状態（病後衰弱）や、肝臓疾患などにおいても優れた成果が見られている。

斬新なのは、ルドルフ・シュタイナーによって指示された、ローズマリー精油（乳化させた形態）を「入浴剤（浴用剤）」および「注射剤」として使用する方法であろう。ローズマリー浴は、身体の内部を強力に温め、神経系を軽度に興奮させる作用を持つ。そのため、一日のうちであまり遅い時間にこの入浴を行うべきではない。

ローズマリー油は、「自我」が自身の肉体の中に十分に参入できなくなっているすべてのケースにおいて好ましく作用する。これは、あらゆる「消耗・虚脱状態」に見られる現象であり、また体質的な傾向としては「糖尿病」の素因において見られるものである。糖尿病におけるローズマリー浴の優れた効果（シュタイナーが最初に推奨したもの）は、多くの医師によって確認されている。また、糖尿病に対しては「ローズマリーのD4〜D5（※ホメオパシーの希釈度）」の注射によっても成果が報告されている。もし、純粋に魂（精神）の領域にのみ現れる「自我の弱さ（主体の確立の難しさ）」が存在する場合は、ローズマリーのD25という高ポテンシーの注射を試みるのがよい。それによって、夜間の不穏状態（精神病における不穏を含む）が鎮静化されることも多い。

メリッサ（レモンバーム、「ミツバチの草」の意）においては、ローズマリーに比べて「造形的・流動的なもの（水の要素）」のより強い影響が見られ、それがこの植物に、より「草木」らしいキャラクターを与えている。芳香化のプロセスはローズマリーほど強烈ではなく、穏やかなレモンの香りに達するに留まり、それに応じてエッセンシャルオイルの含有量もはるかに少ない。

メリッサ（浸出液、または「メリッサ・スピリッツ」として）は、有機体全体に穏やかで極めて心地よい「通気（ Durchatmung ＝呼吸が体の隅々まで行き渡ること）」をもたらす。それは、体内の「水組織」と「空気組織」の正しい関係性を確立してくれる。その繊細なキャラクターに対応して、メリッサは特に女性と子どもに適している。

メリッサは、有機体の不十分な通気に起因するあらゆる不調に適用される。例えば、軽度の胃腸障害（食べ過ぎや寝冷えによるもの）、鼓腸（ガス溜まり）、月経不順や月経痛、帯下（おりもの）、およびこれらに伴う「神経性の障害」（痙攣、心悸亢進（動悸）、喘息様の苦しみ、不眠症、偏頭痛、ヒステリー、メランコリー（うつ状態））などである。特に、上気道の領域における「痙攣を鎮める作用」は非常に高く評価されており、「コデイン（中枢性鎮咳薬）の代わり」になるほどである。（個々の婦人科系の適応症については、第2分冊の「婦人科」の章を参照。）

タイム（Thymus vulgaris ＝タチジャコウソウ、および Th. Serpyllum ＝イブキジャコウソウ）は、いわば「ミニチュアサイズになったローズマリー」と呼ぶことができるかもしれない。ただし、タイムの場合、花のプロセスは葉のリズムから切り離され、シュート（茎の先端）の頂点に配置されている。その香りはローズマリーよりも重く、精油はより濃厚である。その精油は、自らの内部から「チモール」という固体の成分を析出させる。

この植物の作用は、より高い領域、すなわち「リズムシステム（胸部）」へと向かう。タイムは有機体の強力な「内なる通気（呼吸活動）」を活性化するため、くる病（骨軟化症）や滲出性体質（リンパ体質・アレルギー素因）において優れた成果をもたらす。タイムは咳や百日咳における痙攣状態を和らげ、田舎の人々にとっては「これ一つで薬局全体」を代用できるほどのものである。さらに、利尿作用や神経強壮の特性もあると言われている。

あらゆる形態の甲状腺毒症（甲状腺機能亢進症・バセドウ病など）」においては、タイムは禁忌とされる。なぜなら、これらのケースにおいてタイムは「ヨウ素」と酷似した作用を及ぼすからである。

セージは、タイムから変態して現れたかのように見える。葉はより幅広くなり、水的なものや陰との親和性を増し、それらの力をより強く自身の内へと迎え入れている。しかし、この植物は熱とも密接な関係を持っており、その分布域はローズマリーの分布域とほぼ一致している。

植物の性質がより「葉」の方向へと向かっていることに対応して、その精油はタイムほどスパイシーでも情熱的でもない。それどころか、一部のセージの仲間は、いわば水的な草本性へと変性してしまい、その香りは汗のようであり、どんよりとこもったものになるか、あるいは固形樹脂の中に揮発性の芳香物質を閉じ込めてしまうことさえある。プラテンシスセージにいたっては、ほとんど無臭である。

しかし、セージにおいては、エッセンシャルオイル（精油）に加えて、新たな成分が重要な意味を持って加わってくる。それが集中的な「タンニン形成」であり、そこには形態形成の力が強く作用していることが表現されているのである。

セージが持つ「熱の力」を捉える働きに加えて、タンニン（鞣質）がもたらす「形態形成プロセスを刺激する効果」が加わる。それは汗を抑える働きとなって現れる。セージは、あまり汗をかかない人に対しては発汗を促し、大量に汗をかく人に対しては発汗を抑える、つまり全体として「調節作用」を果たす。結核患者に見られる激しい寝汗に対しても、セージは好ましい影響を与えるため、一般に用いられるアトロピンを不

要にするほどである。また、授乳を抑制するためにもセージが用いられる。そのお茶は、口腔内の炎症（扁桃炎、歯の痛み）の際の良いうがい薬となる。

マジョラム（Origanum vulgare）の葉は、セージと同様に幅広く形成される。そして、開花プロセスは葉群（葉の生い茂る部分）から押し出されるようにして茎の先端へと押し上げられ、そこで緑色の、ハチの巣（ビーハイブ）に似た、長丸くまとまった構造へと凝縮する。植物全体としては、セージよりも草本性（みずみずしさ）を残して柔らかく、しかしより「熱の性質」を帯びている。ローズマリーにおいては花が葉の領域へと引き込まれていたのに対し、マジョラムでは逆に「葉的なもの」が熱の圏域へと引き上げられている。そのため、セージのような細長い円錐花序は形成されない。

したがって、マジョラムは物質代謝における「リズム的プロセス」に影響を与えることが期待できる。下部組織が過度に冷えることによって引き起こされる不調に対し、マジョラムは月経を調節・促進し、子宮を強壮にし、消化を助けるように働く。

ウッド・セージ［ニガクサの仲間］（Teucrium scorodonia）にいたっては、このシソ科植物は非常に風変わりな挑戦を自らに課している。すなわち、森の陰（日陰）や湿気の中へと入っていくのである。そこにおいて、この植物は、光が不足して徒長（もやし化）した植物のように上方へと急成長し、葉の輪（葉冠）から上方へ向けて、淡い黄色の細長い花序を伸ばす。下方（根の方）に対しては、この植物はタンニンや苦味物質を形成することによって、水的なものが過度にせり上がってくるのを防いでいる。上方（頭頂部）に対しては、十分な光と熱の力を取り込もうと奮闘している。この闘いの中で形成される精油の臭いは、それゆえに、どんよりとして重く、芳香はあるものの汗臭く、まるで植物自身が自らに汗をかかせているかのようである。同様の臭いは、同じく森に自生するシソ科植物であるイヌゴマ（Ziest）にも見られる。

この植物の持つダイナミズムに対応して、私たちはリズム系統に対して、非常に強く「光で満たし、熱を与える作用」を期待することができる。多くのシソ科植物がそうであるように、下部からせり上がってくる物質代謝プロセスと闘っている肺疾患の患者にとって、この植物は助けとなる。古くから結核や気管支カタルは、テウクリウム［ニガクサ属］の適応領域であった。また、小児科における臨床でもこの手段は考慮に値する。ある少年は、3歳から7歳までの間、突発的かつ一見して危険な発熱を繰り返していた。それは2〜3日続き、あらゆる治療を受け付けなかった。しかし、テウクリウムのお茶が、短期間でその症状を消失させた。——ルドルフ・シュタイナーは、ウッド・セージを「子宮におけるバランス調整のための特効薬」と呼んだ。更年期障害に対する応用も、この性質に基づいている（第2分冊の婦人科学の章を参照）。

ペパーミント（Mentha piperita）の適応症については、冷却によってメントールが分離するエッセンシャルオイル（ペパーミント油）を含んでおり、あまりにもよく知られているため、ここでは個別に詳しく列挙しない。ペパーミントのお茶やオイルが舌の上に残す独特の「冷涼感」は、燃えるような芳香の強い味の後にやってくるものであり、この植物のシソ科としての性質に特別なニュアンスを付け加えている。

シソ科植物の典型は、カキドオシ［グレコマ］（Glechoma hederaceum）によって、完全に「大地の領域」へと引きずり込まれる。それも、光と熱の力がまだ弱い、春の「水的なプロセス」の中へとである。大地の力が優勢であることは、地面を這い回り、ランナー（匍匐茎）によって増殖する茎の強い生命力に表現されている。葉は、水的なものが支配的であるときには常にそうであるように、幅広く、草本性で、丸みを帯び、鋸歯（ギザギザ）を持つ。この「草本的・水的」なものの中へと、シソ科植物の本質である「熱の存在」は、夏の植物におけるよりもはるかに苦労して這い入っていく。明確な花序の形成には至らず、地面を這い進みながら、葉と花がリズムを刻むように繰り返される。それにもかかわらず、この植物は芳香とスパイスの風味を持つようになり、「春のハーブスープ（Frühlingskräutersuppe）」の人気の具材となっている。ここにおいてシソ科の熱プロセスは、根の生命プロセスと密接に浸透し合っている。カキドオシは、いわば「春のテウクリウム（ウッド・セージ）」と呼ぶことができるだろう。

［カキドオシは、いわば］「春のテウクリウム」と呼ぶことができるだろう。気管支から腸に至る内臓諸器官の組織のカタル（炎症）において、それらのカタルが「呼吸による浸透（Durchatmung：組織に熱と光が行き渡ること）の不足」に起因している限り、カキドオシは適用される。したがって、その作用範囲は、こうした原因から生じる結核への傾向（素因）にまで及ぶ。

〔セリ科（Die Umbelliferen）〕

セリ科（約2600種）という広大な植物群の最も際立った特徴は、「葉的なもの（Blatthaften）」が、植物界において類を見ないほど驚くべき豊かな造形変化を示すことにある。全縁（ギザギザのない）の最も単純な形態は、水中（ウボクサ／チドメグサ属）だけでなく、高山に生息する種（ホタルサイコ属）にも見られる。鋸歯（ギザギザ）や切れ込みのある葉は、サニクル（ウマノミツバ属）やアストランティアのように、陰や湿気を好む森の草本が持っている。この科の牧草地やステップ（草原）の植物（シャク、ワイルド・チャービル、ドクニンジン、ジャイアント・フェンネルなど）では、葉は2回、3回と羽状に細かく裂ける。そして最終的には、とりわけ光に満ちた空気の中に生きるフェンネル、ディル、メウム（クマウイキョウ）といった種にいたっては、その葉群は文字通り空気の中へと溶け去ってしまう。セリ科植物は、自らが好む「水的なもの」から脱して、とりわけ強く「空気的なもの（空気の要素）」へと移行していくのである。これと並行して、植物は揮発性の芳香物質を形成するが、植物がその造形において空気の元素をより多く取り入れれば取り入れるほど、その香りはより繊細なものになる。

しかし、このように植物全体を貫いて流動する「葉の生命」は、まず根によって引き止められる。根は強力な生命の「収縮」によって、葉を通じて宇宙的なものから捉えられるもの、そして根を通じて地球的なものから捉えられるものを、自らの内へと吸い寄せる。宇宙的な力は、まず植物の地球的な極（根）の深いところまで「吸入」されるのである。この、通常は1年間続く収縮に続いて、翌年には同じように強力な「拡張」が起こる。花茎が急激に伸長し、散形花序の放射状の枝へと走り、やがて星雲のように、数え切れないほどの小さな花が、傘やドームの形にゆるやかにまとまって、茎の上方に浮かぶ。花は完全に平らで開いており、そこから雄しべが火花のように飛び出している。果実は乾燥しており、形態的にはしばしば小さな茎の節のようである。ここでも果実は、線状に飛び散るという原理に忠実であり続けている。

しかし、葉や花の形成だけでなく、この植物は中空の茎、葉柄、果実、空気を含んだ部屋を持つ根茎、そして袋状に膨らんだ葉鞘（ようしょう）によっても、空気的なものを包み込み、自らの組織に組み込もうとする。だがこれによって、セリ科植物は植物的な領域を超え出ようとしている。なぜなら、通常の植物において、その造形力組織（Bildekräfteorganisation）に割り当てられているのは「固体（固的なもの）」と「液体（水的なもの）」だけだからである。魂を持つ生き物（動物や人間）だけが、独自の「空気組織」を形成し、それを呼吸プロセスによって維持している。しかし、セリ科植物はこれほど強く自らを「空気で満たす（durchluften）」ことによって、本来であれば自らの外側の外皮にとどまるべき「アストラル圏」を、内側へと取り込もうとしているのである。

上述した「空気化（およびアストラル化）」の結果として生じる芳香物質に対して、植物の下部組織はその液体的な本性からガム質や粘液物質を送り出す。その結果、芳香的なものと粘液的なものの両者が結びつき、「ガム樹脂」を形成する。これはセリ科植物に非常に特徴的なものである。通常の植物であれば硬い木質化として鉱物的な無生領域へと向かってしまうものが、セリ科植物においてはエーテル的（生命の領域。それは常に有機的・液体的なものの中で波打っている）な領域にとどまる。そして、それがガム状の物質へと変容されるのである。また、通常の植物であればアストラル的な周囲の空間に向かって香しく開花するはずのものが、この粘液的な領域へと引きずり下ろされ、そこに縛り付けられる。

このように、空気的・アストラル的なプロセスを異常なまでに内へと引き込むことによって、この植物科の中からは強力な毒草が生まれることになる。その際に形成される毒素は、こうしたアストラル的なプロセスによってもたらされた刻印である。したがって、それらの毒素は、アストラル体を備えた生物に対して作用

する。これらの作用は、アストラル体と他の構成元素（エーテル体や肉体など）との関係を調節することが求められる場合に、治療に役立てることができる。

ここで簡潔にスケッチしたセリ科植物の本質像から、その治療適応の領域が導き出される。

（1） セリ科の作用を顕著に受ける器官領域の一つは「腺組織（分泌腺システム）」である。多種多様な消化腺や乳腺の活動が、それによって促進される（ただし、一部の種では抑制される）。腺は液体組織の器官であり、したがってその構築プロセスを維持する「エーテル体」の器官であるが、それらは「アストラル体」によって捉えられ、アストラル体は腺の中で分泌と分解をもたらす。意識の展開ではなく、生命の維持に仕えているこれらの器官（腺）においては、アストラル体とエーテル体が、植物に類するような方法で活動している。その造形原理は、最も単純なものから最高度に複雑なものに至るまで、分岐と分散のあらゆる可能性とバリエーションを示しており、それはセリ科植物の構造プランが植物的な方法で実証している通りである。

（2） また、セリ科植物は、アストラル体が液体の有機体に介入するあらゆる場所でその効果を発揮する。それらは、エーテル体に対するアストラル体の働きを強化する。すなわち、分泌を促進し、利尿・発汗を促すとともに、去痰（痰を出すこと）も促進するのである。

（3）アストラル体が浸透している「空気組織」に対して、セリ科植物は直接的に作用する。それは腸管領域におけるガスの停滞（膨満感）のときだけでなく、呼吸器系や循環器系においてアストラル体が「痙攣（過度な緊張）」を起こしているときにも認められる。喘息、てんかん様痙攣、百日咳、狭心症などは、特定のセリ科植物の適応領域となる。また、その鎮痛作用――そもそも痛みを体験するのは常にアストラル体である――も、この性質と深く結びついている。

以下、セリ科（散形花序植物）に属するいくつかの重要な薬用植物について、スケッチ風に記述していく。

「水的なもの」の持つ造形傾向がセリ科植物の本質の中に強く侵入してくると、空気と熱の要素が、その液体的なものとの間で激しいせめぎ合いを起こす。ドクゼリ（Cicuta virosa）においては、空気的なものが水的なものに打ち勝つ。それは葉を微細に分化させ、飛び散るような花序のシステムに空間を与え、茎を空気で満たし、根茎の内部をすっかり空洞（気室）で区切る。このように、空気の元素を根の領域にまで深く移行させることが、ドクゼリの際立った特徴である。その中毒症状（めまい、嗜眠、瞳孔散大、てんかん様痙攣、消化器官の炎症、嚥下困難、舌の麻痺）から、ドクゼリの治療効果を読み解くことができる。顎の痙攣（破傷風様痙攣）、強直性痙攣に似た諸症状、狭心症、百日咳などは、この植物が持つ治癒作用の方向性を示す一例であり、それはアストラル体の病的な過剰活動を鎮める方向へと向けられている。また、痛風、リウマチ、さらには癌に起因する傾向に対しても、ドクゼリ軟膏が持つ鎮痛効果を発揮する理由は、ここから理解できる。

セロリ（Apium graveolens）においては、その治癒作用はアストラル組織にまで及び、消化腺の活動を刺激する。セロリは膀胱や腎臓の疾患、結石や砂粒（尿路結石・砂尿）の形成に対して、また同様に痛風やリウマチに対しても治癒効果をもたらす。このような治癒効果は、セリ科植物であると同時に「塩生植物（塩を好む植物）」でもある植物に期待されるものである。野生種のセロリは、塩分を含む湿地や海岸の勝手口に生息している。その灰は非常に高い塩分含有量を示す。水面での反射によって強化された光と空気の作用を、この植物は、塩の作用によって影響を受けている「根のプロセス」の中へと運び込んでいるのである。

ヘイル・サニクル［ウマノミツバの仲間］（Sanicula europaea）においては、（セリ科特有の空気の）浸透が和らげられており、そのことは、手のひら状に裂けているだけの丸い葉に表現されている。サニクルはカルシウム（石灰）とケイ酸（シリカ）を豊富に含み、さらにサポニン、エッセンシャルオイル（精油）、樹脂、タンニン（鞣質）をも保持している。この古くから高名な薬草は、傷の治癒を促進し、化膿した傷を清浄にし、止血を行い、さらに肺、胃、腸、腎臓からの内出血に対しても有効であるため、アルニカと同じよ

うに用いられてきた。胃腸管の炎症も治癒させる。この植物の重点は根茎にあり、その強い生命力の中には、葉がセリ科らしく周囲の光と空気の領域から吸い込んだものが、ケイ酸プロセスとタンニン酸を介して刻み込まれている。そしてそれは、サポニン、精油、樹脂の形成となって現れている。この植物の「根的なもの」は、血液システムや物質代謝システムの活動に対して、「神経・感覚組織」が持つ形成力を支えることができる。物理的肉体が損傷した際には、エーテル体（生命体）に対して正しい道筋を示し、血液プロセスの炎症や形を失っていく現象に対して、形態形成の力をもって立ち向かうのである。アストラル圏の侵入が和らげられていることに対応して、これまでに挙げたセリ科植物に見られたような、痙攣を和らげる作用や腺を刺激する作用は後退している。

ニンジン（Daucus Carota）は、セリ科植物の中にあって「バランスの中心」に位置しており、それはバラ科植物におけるバラのような存在である。ニンジンは、光、水、ケイ酸、腐植土、そして熱がバランスよく相互に作用し合う土壌を好む。光に満ちた空気に寄り添うように微細に分化した羽状の葉は、最初の1年目に、糖分と栄養分に富んだ根を構築する。その根はカロテン色素によって黄赤色に彩られている。カロテンは、通常は葉において葉緑素のすぐ隣に存在し、それによって覆い隠されているものであり、植物が光の力を取り込む際に重要な役割を果たしている。それはまさに「光の物質」である。人間の有機体において、カロテンはビタミンAへと変換されるが、ビタミンAは感覚圏（頭部システム）、ひいては外胚葉全体の活性化プロセス（生命化プロセス）と結びついており、光の器官である「目」の中に最も高い濃度で存在している（視物質のロドプシンなど）。また、その灰も、ケイ酸と鉄の含有量を通じて、ニンジンの持つ光との結びつきを示している。ニンジンは、自らが持つケイ酸の力を借りて、宇宙の周辺圏を特に集中的に根へと引き下ろし、そこで地球的・水的な領域と調和を保ちながら織り合わせる。この「吸気プロセス」に続く、花と果実における「呼気」は、微細な分化と、多数の花の調和に満ちた統合を経て、秩序ある半球状の散形花序（傘状の形）をもたらす。この花序は、しばしばその中心点に「深紅色の小さな中心花」を際立たせており、このこともまた、このセリ科植物が持つバランスを維持する性質と節度を示している。

その「光とケイ酸のプロセス」を伴ったニンジンの根は、子どもにとって理想的な栄養植物である。それは頭部と感覚システムを刺激する。さらに、子どもが持つ「自我」と「アストラル体」は、この植物が持つ形態形成的な熱と光のプロセスを利用して、子どもの新陳代謝領域（腹部システム）の構築的なエーテル的活動へと力強く介入し、骨の形成にいたるまで、秩序ある成長を展開させることができる。ニンジンの根が持つ、よく知られた「抗寄生虫作用」も、物質代謝システムが光プロセスによって「光で満たされる（Durchlichtung）」ことから納得がいく。他方で、花と果実という上部の極は、アストラル体が下部組織へとより強く介入するのを助ける。ニンジンの果実（種子）は、月経や受精（妊娠）を促進するだけでなく、水分を排出し、利尿を促す働きも持っている。

キャラウェイ（Carum Carvi）においても、高いケイ酸（シリカ）、鉄、マンガンの含有量は、この植物が持つ強い光との結びつきを物語っている。キャラウェイの煎じ液を用いることで、消化管におけるアストラル体の弛緩や、エーテル体（生命体）の緊張低下を効果的に解消することができる。その抗痙攣作用や駆風作用（ガスを排出す働き）、通経作用、そして胃や子宮の痙攣、心気症やヒステリーに対する影響は、これまでに述べてきたセリ科植物の本質上にまさに位置している。

アニス（Pimpinella Anisum）は、セリ科の基本モチーフを次のように変化させている。すなわち、春の短い雨期の間に収縮的な「吸入と根の形成プロセス」が完了し、その後、夏の空気・光・熱の作用の増大とともに、同じ年のうちに「拡張」が起こり、ゆるやかで空気を含んだ白い花の雲へと解き放たれるのである。ルドルフ・シュタイナーの指摘（『精神科学と医学』第10講を参照）によれば、本質的なのは微細な「鉄・塩プロセス」であり、これは他のセリ科植物にも見られるものの、それらにおいてはより粗雑で物質的であるのに対し、アニスにおいてははるかに動的に作用している。治療効果としては、抗痙攣作用や駆風作用が見られるが、それはこれまでの植物よりもさらに顕著であり、わずかに麻酔的なニュアンスを帯びている。また、咳を鎮め、痰を切り、喘息状態さえも解消する効果も、これまでに挙げたセリ科植物に比べて強化されている。アニスは、さまざまな方法で体液組織を「空気で満たし、アストラル化する（durchastralisieren）」のを助けるのである。

「空気的なもの」をとりわけ際立って表現しているのが、フェンネル（Foeniculum vulgare）である。フェンネル畑は、およそ想像しうる中で最も空気のような軽やかな印象を与える。この薬用植物においては、空気の組織（アストラル体）へのセリ科特有の作用と、腺組織への作用（流体組織の強壮化）が特に高められている。痛みの緩和や、頑固な気管支炎における去痰作用はあまりにも有名であり、同様に乳幼児の鼓腸（ガスが溜まること）への適用もよく知られている。種子の灰に含まれる重大なケイ酸含有量と結びついた感覚システムへの作用は注目に値し、特に視力障害や眼の炎症に対して効果を発揮する。

ドクニンジン（Conium maculatum）においては、自らを「空気で満たす」際に作用するアストラル的原理が、流体の中で支配しているエーテルの造形力に対してあまりにも強くなりすぎたため、エーテル的なものを圧倒し、直接的に物理的な領域へと侵入してしまっている。最初の成長期に、極端に細かく裂けた葉群から構築された根は、アストラル化された周囲の力を、乳汁形成の奥深くへと引き下ろす。翌年、この植物は外の世界に向かって猛烈に「呼気」を行う。エーテルを媒介する水の元素を、植物は空気の領域へと非常に強く蒸散させるため、暑い日には植物がぐったりと弛緩して立っているほどである。まるで毒性のある「空気の化身」であるかのように、この植物は、ネズミの尿のような臭いのする、どんよりとした動物的な霧の雲で自らを包み込んでいる。上部の器官に向かうにつれてますます強く蓄積されるアルカロイドの「コニイン」は、ドクニンジンにおいてはエッセンシャルオイルのような揮発性の性質を帯びる。セリ科に一般的な治癒作用は、この植物において特徴的な方法で変容されている。ドクニンジンによって腺の活動は抑制され、乳汁分泌は抑えられ、ついには枯渇するにいたる。湿布や軟膏は、潰瘍や腺の硬化、腫瘍を軟化させる。それは神経、皮膚、精巣の炎症を退ける（精巣への作用は去勢に類似することがある）。しかし、最も強いのはアストラル体への影響である。癌に起因するものに対してさえ発揮されるその鎮痛特性は、他のセリ科植物のそれをはるかに凌駕している。興奮状態における鎮静剤、すなわち「怒りの草（Wutkraut）」として、ゲルマン民族はすでにドクニンジンを知っていた。胃、腸、膀胱の痙攣だけでなく、喘息、百日咳、てんかん、さらには舞踏病、躁病、振戦せん妄における抗痙攣効果も同様に重大である。これまで述べてきたセリ科植物において、アストラル体をその過度な結合や痙攣から解放する能力として、あちこちで響き合っていたものが、ドクニンジンにおいては支配的な原理となっている。すなわち、空気の軌道において、アストラル圏が植物的なものの中へと過剰に介入しているのである。致死量の中毒においてさえ、意識と心臓の活動は最後まで維持され、中毒者は安らかにその物理的肉体を脱ぎ捨てる。古典的な例として、ソクラテスの死がそれを証明している。

ラベージ［リベッジ］（Levisticum officinale）は、多くのセリ科植物のように開花によって自らを完全に放出し尽くすことはせず、開花後、その生命を根の内部へと潜らせる。この根には黄色の乳汁、液状のバルサム樹脂、そして豊富な粘液糖が含まれており、さらに濃厚なエッセンシャルオイル、タンパク質、ガム質物質、リンゴ酸、アンジェリカ酸が保持されている。リベッジは、利尿障害、心臓性水腫、浮腫性の腫脹の際に、体液組織へ力強く介入する。それは腎臓の活動を促進し、膀胱炎、蛋白尿、腎症、および腎機能不全に起因する偏頭痛に有用であり、同様にこれらの疾患によって引き起こされる悪臭を放つ汗に対しても有効である。また、消化腺の活動を刺激する。硬化性疾患、痛風、リウマチ、腎結石、脾臓・肝臓の疾患において、リベッジはアストラル体が分解プロセスへと介入するのを手助けする。この構成元素（アストラル体）の強壮化に、月経閉止（無月経）や稀発月経におけるその治癒力が基づいている。総じてリベッジは、下腹部管全体を活性化させるように作用する（第2分冊の婦人科学の章を参照）。根の煎じ液は浴剤として下腹部の器官を強化する。重要な適応領域の一つは「中耳炎」である。聴覚において完全にアストラル体と自我に仕えるべき「空気の器官」である耳において、エーテル的プロセスが過度に強くなり、炎症や増殖性の腫脹を引き起こしているとき、リベッジは効果を発揮する。

この偉大な薬用植物科の最も完全な代表者の一つが、アンジェリカ［大天使草］（Angelica Archangelica）である。この植物もまた、膨らんだ袋状の葉鞘、下部が空洞になった茎、そして空洞の種子の中に空気的なものを閉じ込めている。この植物は、セリ科植物が到達しうる中で最も繊細な香りである芳香を自らの内に抱いている。それはスパイスの効いた揮発性を持ち、アルプスのシュタウプバッハの滝の水しぶきが持つ新鮮さを思わせる。すなわち、空気の中へと最高度に洗練された「流体（水的なもの）」であ

る。これまでに扱ってきたセリ科植物において示されてきた治癒効果が、ここでは包括的かつ特徴的に現れている。特に印象的なのは、腺の腫脹、炎症、硬化の治療におけるアンジェリカ療法であり、とりわけ頭部・頸部領域、そして何よりもアデノイド体質（腺病質）の子どもの治療において顕著である。これらは、アストラル的なものが頭部から下方（新陳代謝システム）へと 下降することができないか、あるいは頭部へと逆流してしまうことによって生じる疾患である。ここではエーテル的なものが過度に自律してしまい、主にエーテル的に条件づけられた器官である「腺」において特に肥大している。水的なものを完全にアストラル化し、それをすっかり空気的なものへと導き出し、地球の「頭部領域」（すなわち寒冷地）に自生するアンジェリカは、このようなプロセスに対してまさに相応しい薬用植物なのである。

【2　典型的な薬用植物】

〔キンポウゲ科〕
〔サボテン科〕

●基本的な視点

人智学的なゲーテ的植物学・薬用植物学の立場から、
キンポウゲ科とサボテン科を「典型的な薬用植物」として捉え直す。

植物の形態・変態・物質形成は、四大元素（水・空気・光・熱／大地）や
エーテル体（生命・造形力）とアストラル体（宇宙的・感覚的・形成力）の働き、
太陽力と月力の相互作用の表現として理解される。

植物は特定の「景観」の力から本質を築き、
人間のミクロコスモスでは対応する「内なる風景」
（上部組織＝頭部・感覚、中間＝リズム系、下部＝物質代謝・体液）に働きかける。

形態の可塑性・硬化・開花の強弱、揮発性物質やアルカロイド・配糖体の形成が、
治療的な対応関係を示す指標になる。

キンポウゲ科では太陽力と月力が比較的調和的に結びつき、
サボテン科では両者が対立・緊張関係にある点が対比されている。

●要点

キンポウゲ科（ウマノアシガタ科）

・形態の特徴：
　可塑的で動きに富み、「あふれ出る」性質。
　主に水を必要とし、空気・光で完成。
　大地的な硬化や熱は弱く、高木や芳香植物はほとんどない。
　草本・多年草が中心。

・葉の変態：
　丸みのある形から鋸歯・掌状・脚状へ、
　さらに羽状・糸状へと空気中へ溶けていく方向へ急進。
　エーテル的造形力がまず働き、
　宇宙的・アストラル的なものが変容を促し、豊かな花へと至る。

・物質：
　みずみずしい液汁に揮発性の強い刺激・炎症物質が浸透（乾燥で消失しやすい）。
　開花プロセスの優勢がアルカロイド（例：アコニチン）へ導くことがある。
　最初は配糖体やアネモニン様物質など一時的な形成。

・主な例と治療的対応：

　オキナグサ（Pulsatilla）：
　花に仄暗さ・うなだれ感。

繊細でアストラル浸透不十分、湿って冷たい身体、
憂鬱で涙もろい神経質な人（スクロフラ・風邪罹患性）に。

ヒメリュウキンカ（Ranunculus ficaria）：
日陰の湿った場所、地下で珠芽形成。生草軟膏が痔疾に。

アドニス（Adonis vernalis）：
空気の分化・羽状化を強く取り込み、乾燥気味の丘陵を好む。
エーテルとアストラルの強い緊張が心臓配糖体に現れる。

シャクヤク（Paeonia）：
より水の造形力と結びつき、骨太・物質的。
熱で火のように形づくられるが「水の中で燃える火」。
種子・根は抗てんかん・痙攣鎮め。
体液有機体の秩序づけ（水腫・腹水、心不全時のエーテル離脱に対して）。
シュタイナーは根＋キバナアザミの製剤を推奨。

オダマキ・ヒエンソウ（Delphinium）：
花の内折・包み込みが進み、動物に近づく。距・蜜腺の発達。
アストラル化がアルカロイド形成に。傷治癒や眼への効果の伝承あり。

トリカブト（Aconitum napellus）：
夏の最高潮。形態形成力が最大級。
兜状・左右対称の花、昆虫頭部・吸管への適応。
原生岩・ケイ酸質・渓流沿い。
上部組織（頭部・感覚）が弱まり、代謝・流体が上部へ乱入し、
熱が防御的に過剰になる場合（熱を伴う風邪など）に。
プネウモドロン1やインフルドに配合。夜驚症・頻脈にも。

クリスマスローズ（Helleborus niger）：
晩冬の異例の開花、弱められたアストラル性（花が萎れず葉的に生き続ける）。
アルカロイドではなく配糖体。
体液強壮（血圧上昇、ジギタリス様利尿・強心）、
髄膜炎様症状や腎炎後遺症に。
シュタイナーは男性癌の補完療法にも言及
（ヤドリギと同様、季節サイクルに抗う開花。
上部の造形傾向が下部へ乱入する癌の異常性と対応）。

サボテン科

・形態の特徴：

水的なものが球体へ膨らみ内に閉じこもろうとし、
空気・熱が分化を試みるが外皮を乾燥・刺・針・剛毛へ硬化させるにとどまる。
葉・側枝は抑制され、いぼ・刺座・稜として暗示されるのみ。
リズム的中間領域がほとんど消える。
成長は緩慢で形態変態が停止。
円盤・球体・柱が基本。葉序の螺旋が稜として幾何学化。

・生命の性質：

強力な生命ポテンシャルが外部形態変化で生き尽くされず
内部でせき止められるため、驚異的な生命力。
多肉化（サキュレンツ）は通常の発芽・果実段階が恒常化したもの。
中間の茎伸長・葉展開が抑制され、一方の極から他方へ直接移行。
木質化は弱く粘液化、植物酸（不完全な呼吸の産物）を多く含む。
表面に蝋や樹脂。

・開花・果実：

しばしば突然・短命（数時間のことも）。
果実は液果でみずみずしい。

・シュタイナーの示唆：

キンポウゲ科では太陽力と月力が調和的に結合するのに対し、
サボテン科では太陽的なものと月的なものが闘っている。
月＝生命を宿した液体・成長リズム・生殖（水的肥大が持続）。
太陽＝空気・熱・分化。変態の欠如が特徴。
エーテル的せき止めとアストラルとの強い緊張。

・主な例と治療的対応：

ペヨーテ（Lophophora）：
刺なしの平らな球体。メスカリンなどのアルカロイド。
エーテル組織が物理領域へ介入して成長を解き放つのを自ら抑制。
リズム系で高次の構成元素（アストラル、部分的にエーテル）が
緩む状態に対して考慮されうる（幻覚状態との類似から）。

夜の女王（Selenicereus grandiflorus）：
よじ登り、気根、熱帯の地球的な空気。
夜間に巨大な花を開き、強烈な芳香ののち急速に萎凋。
エーテル的造形力とアストラル的本質の闘い（夜間のアストラル性）。
アルカロイド様物質。
心臓領域（エーテルとアストラルのリズム的相互作用、光と重さの中間位置）に。
狭心症などのエーテル的緩みとアストラル的痙攣に、花と若い茎の製剤。

●本文

【2　典型的な薬用植物】

〔キンポウゲ科（Die Ranunkulazeen）〕

キンポウゲ科（ウマノアシガタ科）の植物は、その典型として、可塑的で非常に動きに富んだ造形を示し、数や形態の中に抑え込まれることのない、いわば「あふれ出るような」性質を持っている。それらは自らの本質を力強く展開するために何よりも「水」を必要とするが、そのキャラクターを完全に現すためには「空気」や「光」をも必要とする。硬化をもたらす「大地的な元素」は、彼らのなかでは「熱の要素」と同じく

らいほとんど現れてこない。したがって、植物界のこの大きな科の中に見出されるのは、主としてみずみずしい草本や多年草であり、高木は一本も存在せず、芳香植物や香辛植物もほとんど存在しない。

水と空気が春の完全な光の中で出会う場所こそが、キンポウゲ科植物にとって主要な発達の場であり、開花の時期となる。水、空気、光の器官である「緑の葉」は、彼らの本質を特に明瞭に顕現させており、その形態傾向は、これらの植物にその名（Hahnenfuß＝雄鶏の足）を与えることになった特徴的な形を好んでとっている。ここでは、葉の変態があらゆる豊かさと多様性をもって生き生きと展開されており、それは個々の植物を観察するときにも、科全体を概観するときにも同様に気づかされることである。液体の造形力（エーテル体）の働きは、まず可塑的な丸みを帯びた形に現れ、それが徐々に鋸歯を持ち、伸び、手のひらや足の形（掌状・脚状）に裂けていく。しかしその後、空気と光がその形成にいっそう多く関与するようになるにつれて、葉の形態は羽状へと向かい、さらには最も微細な裂片や糸状へと、空気の中へ文字通り溶け去る方向へと、押しとどめることなく急ぎ足で進んでいく。

こうした形態の変態に現れている予兆は、多様な「物質の変態」の中にもその写し絵を持っている。これらの植物のみずみずしい液汁の中には、刺激が強く、炎症を引き起こす作用を持ちながらも、非常に揮発性の高い物質が浸透しており、それらは植物を乾燥させると消失してしまうことが多い。この科に特有の、強烈に侵入してくる「開花プロセス」は、これによってあらかじめ予告されているのである。その開花プロセスが優勢になると、より強固に定着し、塩のように酸と結合するアルカロイド物質の生成へと導くことがある。最初、芽生えのみずみずしさの中にはエーテル的な造形力の活動が発現しているが、宇宙的・アストラル的なものは、最初は目に見えない形で働いている。それは造形力を絶えざる変容へと鼓舞し、それによってあの多様な形態変態を生み出す。そして最終的には、豊かな花の形成において目に見える表現を獲得するのである。しかし、宇宙のアストラル性は物質の変態の中にも作用している。最初は、配糖体やアネモニン様の物質の形成に見られるように一時的であるが、集中的な介入が起こると、たとえばアコニチン毒（トリカブトの毒）のようなアルカロイドの生成をもたらす。

以下に、この科に属する治療上重要な幾つかの植物について述べる。

オキナグサ（クッヒェンシェルン：Pulsatilla属）においては、その青や茶紫色の花の中に、まだどこか「仄暗いもの」や「うなだれるような重さ」が生きている。セイヨウオキナグサ（Pulsatilla vulgaris）は、繊細な組織を持ち、スクロフラ（腺病質）や風邪への罹患性を伴う神経質な人々、すなわち、いわばアストラル体の浸透が不十分で、過度に湿気があって冷たい身体を持ち、憂鬱な気分で、すぐに涙を流す傾向のある人々に対して、その治癒力を発揮する。

数多く存在するキンポウゲ属（Ranunculus）の中から、ここではヒメリュウキンカ（Ranunculus Ficaria）のみを挙げる。この植物は、日陰の湿った生垣の下でその葉を地面にそっと寄せ、その成長プロセスを地下で不定芽（珠芽）を形成することにつぎ込んでいるが、細い葉を伴った黄色い花を咲かせるときには、太陽のように上方へと向かって伸びていく。民間医療においては、この新鮮な生の草本から作られた軟膏が、痔の不調（痔疾）に対して好んで用いられている。

アドニス（フクジュソウ属：Adonis vernalis）は、空気元素が持つ「分化させ、羽状にする性質」を特に集中的に自らの内へと取り込み、それによって強力な開花プロセスへの道を開いている。湿気を強く遠ざけ、それゆえに比較的乾燥した丘陵の牧草地を好むこの繊細な春の花は、太陽のような輝きの中に完全に同化している。私たちはこの植物に、エーテル的力とアストラル的力の間の強い緊張を見て取ることができ、それは心臓に作用する配糖体の形成にも表現されている。

これに対して、シャクヤク（Paeonia officinalis）は、より「水」の造形力と結びついている。ここにおいて植物的なものは、すでに、より骨太で物質的なものに変容している。私たちは、いまだ草本性で旺盛ではあるものの、すでに熱のプロセスによって強く捉えられた植物を、「ボタン（農家のバラ：Bauernrose）」とも呼ばれるこのシャクヤクの、どこか無骨で素朴な美しさの中に目の当たりにする。最も繊細な構造を持

つ中国系の品種（名護屋など）にいたっては、スズランのような、あるいはバラに似た芳香さえ漂わせる。私たちの赤いシャクヤクは、より肉厚の葉と塊状の根茎を持っている。夏から流れ出る熱の力は、この植物をすでにいっそう火のように形づくっているが、それは「水の中で燃える火」のままである。シャクヤクの種子と根は、古くから有効な抗てんかん薬（痙攣を鎮める薬）として評価されている。しかし、この植物の治癒作用は、何よりも「精神・霊的なものによる、体液有機体の秩序づけと統御」へと向けられている。これは、流体組織が宇宙の軽さの力を持つエーテル体のインパルスから離脱し、地球の重力の力に屈して、水腫や腹水に陥ってしまった場合である。このような心不全に伴って現れる疾患に対処するために、ルドルフ・シュタイナーは、シャクヤクの根とキバナアザミ（Kardobenediktenkraut）を組み合わせた製剤を推奨した。

オダマキ属（Akeleien）の開花プロセスは、新しい一歩を示している。萼、鐘、あるいは杯の形をした、星のように放射状に広がる花から、ここでは多様な「内折（陥入）」や「抱合（包み込み）」によって、咽頭、喉、兜などの形が形成される。花は水平方向へと伸びて左右対称になり、その造形と方向性において、本来の植物的な領域から踏み出して「動物」に近づくような何かを自らの中に受け入れている。

この傾向は、聖ヨハネの日（夏至）の頃に開花を始めるヒエンソウ［デルフィニウム］（Delphinium）においてさらに強まる。ここでは、すでに高く伸びた夏の多年草（スタウデン）が、強く分化し構造化された葉と、動物のような花を備えている。後方の萼片は、水平に後方へと伸びる「距」を持っており、その中には、同じく距の形をした2つの蜜腺が深く沈み込んでいる。このように強化されたアストラル化の元素は、独自のアルカロイドの形成となって現れる。かつて、この植物には傷を急速に治癒させる力があると信じられていた。それどころか、開花した植物を眺めることで生じる「感覚的・道徳的な効果」そのものが、特にデルフィニウム・スタフィサグリア（Delphinium Staphisagria・ヒエンソウの一種：キンポウゲ科の毒性を持つ二年生植物）において、眼に対して有益であると感じられていた。

トリカブト（Aconitum Napellus）は、キンポウゲ科の典型がそこに現れる、いわば「夏の最高潮」である。アコニト〔訳註：トリカブトのレメディ〕は、外部の宇宙的なアストラル性がその絶頂に達したときに花を咲かせる。背が高く、それでいてその内側に凝縮して育つこの植物は、キンポウゲ科の植物の中で、おそらく最大級の「形態形成の力」を示している。引き締まった確実性が葉を形づくっている。水的に膨張するプロセスは、下方の塊根）の中でせき止められており、そのため、上方の領域ではもはやそれほど大きな意味を持たない。包み込むような「青」から完全に形成された特徴的な「兜の形」を伴った、左右対称（二側対称）の花は、水平に引き伸ばされ、そこへ飛来する昆虫の頭部を型取り、それを受け入れるかのようである。喉のように開き、内臓のように螺旋状のうねりをもって後方へと湾曲している蜜腺において、花は完全に昆虫の吸管に適応している。その好む自生地は、原生岩（火成岩）や、ケイ酸質の土壌を通り、山岳やアルプスの牧草地を流れる渓流であり、そこではいくつかの岸辺の低木が過剰な光をいくらか和らげ、光と闇、湿気と軽やかさ（空気性）の間のバランスが維持されている。このように、環境エレメントが、植物の内部にある造形力と共鳴し合っているのである。

私たちは、特定の宇宙的・地球的な実体の相互作用の表現である、まさに「特定の景観」という背景を前にして、すべての植物を見つめなければならない。植物は、この背景の力から自らの本質を構築するのである。植物から治療薬を取り出し、それを自然界から人間の世界へと導入するとき、その薬は決して有機体全体を一様に捉えるのではなく、人間のミクロコスモスにおける「特別な部分領域（いわば内なる風景）」を好んで選び出す。それは、その植物が地球全体のどこにでも育つのではなく、特徴的な固有の景観から生まれ出るのと同じである。これによって、私たちはあの外部の「トリカブトのプロセス」に対する、人間側の鏡像に目を向けることができる。もし、形態形成の力を持つ人間の上部組織（頭部・感覚システム）がたとえば熱を伴う風邪などによって弱まり、物質代謝のプロセスが、それとともに流体組織が、いわばその堤防を越えて上部組織へと乱入してしまったとき、そして熱の組織が、侵入してきた外部世界の冷たい影響に対して激しい防御に回り、流体有機体や物質代謝領域との調和に満ちた相互作用を失ってしまったとき、トリカブトは強力な治療薬となり得る。プネウモドロン1（Pneumodoron 1）には、ブリオニア（Bryonia）と並んでトリカブトが含まれており、これら両者は、組み合わせ製剤であるインフルド（Infludo）の中にも見出す

ことができる。また、夜驚症（ Pavor nocturnus ）や頻脈（タキカルディ）に対しても、非常に優れた治療効果を発揮することが実証されている。

キンポウゲ科の連なりを締めくくるのは、クリスマスローズ（Helleborus niger）である。この植物は、東アルプス山脈の中標高の山岳地帯、特にその南斜面にある、茂みの多い湿った石灰岩の斜面に自生している。革質で宿存性（冬も枯れない）の、手のひら状に裂けた葉をその力の圏域から伸ばす強力な根茎を伴って、この植物は、この涼しく湿った、軽く日陰になった環境にとどまっている。そして、宇宙的なアストラル性が植物界に及ぼす作用が最も少なくなる、晩冬という異例の時期に花を咲かせるのである。したがって、脱生命化させる花の力は、通常の植物に比べてはるかに弱い。このことは、きらめくような白い花――キンポウゲ科の植物に多く見られるように、この花の領域には萼片も花弁のように組み込まれている――が、開花した後に完全に萎れて死に絶えるのではなく、開花プロセスを終えた後も生き残り続けることに現れている。その雪のような白は深紅へと変わり、次いで緑色へと変化する。つまり、花は文字通り「葉的なもの」として生き続けるのである。このような弱められたアストラル性は（キンポウゲ科においては、常に液体・可塑的な領域で非常に強力に作用するエーテル体と対峙しているのであるが）、ヘレボルス［クリスマスローズ］属においてアルカロイドの形成へとは向かわず、配糖体の形成へと導く。

治療上、クリスマスローズは体液有機体に対して作用し、それを強壮する。そのことを示す兆候として、一方では血圧の上昇、ジギタリス様（強心利尿薬のよう）な利尿の促進、心臓へのジギタリス様作用が挙げられ、他方では脳膜および脊髄膜の充血、瞳孔散大、耳鳴り、めまい、酩酊感（麻痺感）、脳脊髄液の減少、そして精神的な興奮症状が挙げられる。ヘレボルス（クリスマスローズ）のエキスによって、腎炎（特に紅熱性腎炎）の後遺症だけでなく、髄膜炎様の諸症状も退けられる。しかし、髄膜炎というものは、ルドルフ・シュタイナーのある指摘によれば、特定の宇宙的なコンステレーションの下部組織（物質代謝領域）への作用が強すぎる一方で、上部組織（頭部領域）がこれらの下部プロセスを痙攣的に防御することによって発生するものである。

また、男性患者の癌における補完的な治療への新しい応用を、ルドルフ・シュタイナーが提示した。その際、彼によって、通常の地球的な季節のサイクルに抗うようなその開花時期が指摘された。この特徴は、癌に対する主要な薬剤である「ヤドリギ」にも見られるものであるが、クリスマスローズにおけるこのプロセスは、より大地に近い場所で起こっている。クリスマスローズは、その根が持つ強力な生命力によって葉や花の本質を貫き、冬の、宇宙を鏡のように映し出すアストラル条件づけられた開花活動の中へと、「生命エーテル」の働きを運び込んでいるのである。癌腫は、本来であれば感覚器官の形成にふさわしい上部組織の造形傾向が、下部組織へと乱入することによって発生する。下部組織はこれに対して異常な成長プロセスをもって応答し、そこにおいてエーテル体はアストラル体が本来もたらすべき正常な造形インパルスから離脱してしまっているのである。ヘレボルス・プロセスの持つ異常性は、癌の持つ異常性と対応している。しかし、私たちはここで、これらの関連性をさらに詳しく展開することを差し控えねばならない。

〔サボテン科（Die Kakteen）〕

この極めて特徴的な植物科においては、2つの造形原理が主導権をめぐって闘っている。「水的なもの」は球体へと膨らみ、生命を宿した一滴の水滴として、自らの内へと閉じこもろうとする。これに対して、「空気的なもの」や「熱的なもの」は、この水滴を分化させ、解き放ち、自らの圏域へと誘い込もうとするが、それは徒労に終わる。空気や熱は球体を取り囲むように流動するものの、その周辺（ペパーミントやセリ科のような外の世界）をただ乾燥させ、刺、針、あるいは剛毛へと硬化させることしかできない。通常の「正常な」植物であれば葉や側枝などになるはずのものが、サボテンにおいては、いぼ（疣突起）、刺座（アレオーレ）、稜（リブ）、刺として暗示されているだけであり、それ以上に発達することはない。強力な生命のポテンシャルが、外部の形態変化の中で生き尽くされることなく、その内部でせき止められている。形態を持たない、しかしそれゆえに抑えがたいほどに強力な生命が支配しているこれらの植物の、あの驚異的な生命力は、ここから由来している。

円盤（うちわ型）、球体、柱体が、最も典型的なサボテンの基本形態である。それらの成長は緩慢であり、真の植物生命にとって極めて本質的であるはずの「生き生きとした形態の変態」は、大部分において停止させられている。葉は完全に抑制されており、それによって植物の「リズム的な中間領域」は、あたかも消し去られたかのようになっている。茎は、球体を柱状へ、あるいは蛇のような造形へと伸長させることがある。「葉サボテン（クジャクサボテンの仲間など）」は、その茎の節を幅広くし、扁平にすることで、自らが呑み込んでしまった「葉としての本質」をいくらか露呈させている。この科の中で、本物の葉を外へと展開させ、その意味で通常の植物でありながら、サボテンとしては異常な種は、ごくわずかしか存在しない。葉が順序よく並ぶ「螺旋の配置法則（葉序）」は、球体や柱体の稜（縦ひだ）やカネレーション（溝彫り構造）として立ち現れるが、それは恒常的な形へと幾何学化されており、それによって鉱物世界の形態法則のような何かを自らの内に受け入れているのである。

サボテンの刺の中には、一つの植物科が葉の形成や形態の分化において発揮しうる、並外れた多様性が生きている。ただ、それはまさに発生の段階で引き止められ、硬化しているのである。

開花プロセスは、しばしば何年も経たのちに、突如として予期せぬ大きな豊かさをもって沸き起こる。その出現の激しさに対応して、個々の花の寿命は短く、時にはわずか数時間しか持続しない。果実は、花の領域においては蜜としてのみ現れていた「水的なもの」を、再び自らの内へと膨らませる。それらは大部分が液果やみずみずしい食用果実である。多くは美味であり、したがって私たちは、植物界における重要な果樹科の一つを目の前にしていることになる。

水的なせき止め、すなわち多肉化（サキュレンツ：Sukkulenz）という現象は、通常であれば植物の一生において、2つの発達段階で一時的に現れるものである。それは「発芽」のときと「果実形成」のときである。一方の膨張は成長の始まりにおいて起こり、もう一方は生い茂る成長の終わりにおいて起こる。これら両者の間には、茎の伸長と葉の展開が存在している。しかし、サボテンにおいては、この中間段階が抑制されている。サボテンは一方の極からもう一方の極へと直接的に移行するのであり、葉の生命を空間的な現象としてではなく、ただ時間的な現象としてのみ自らの内に宿しているのである。

サボテンの体（茎部）はほとんど木質化せず、その木質形成プロセスは彼らのなかで「軟化（ゼラチン化）」して、強力な粘液形成へと向かっている。この粘液物質は、変容されたセルロース（繊維質）である。さらに、それらは抑制された「呼気プロセス」によって生じる植物酸を豊富に含んでいる。すなわち、生命プロセスの中で糖が呼吸によって酸化されるとき、通常の植物であれば、物質代謝の最終産物として炭酸ガスと水が形成されるにいたる。しかし、多肉植物においては、この分解プロセスが滞り、植物酸（リンゴ酸、酒石酸、シュウ酸、クエン酸）の形成という中途の段階で立ち止まってしまうのである。このような酸は、たとえば未熟な果実の中で味わうことができるものである。果実の成熟とは、糖分の含有量が増加すること以上に、これらの植物酸が酸化分解されることによってもたらされる。

植物粘液は、一度取り込んだ水を非常に強い力で保持する能力を持っている。それは、水的な膨張という段階を、恒常的な生命形態へと仕立て上げるのを助けている。

その表面において、サボテンの体は多くの植物蝋――これは通常であれば果実の外側に認められるものである――を形成し、時には樹脂をも形成する。

ルドルフ・シュタイナーは、これらの奇妙なほど特徴的な形態を理解するための鍵として、次のような示唆を与えた。すなわち、「サボテン科植物においては、太陽的なものが月的なものと闘っているのに対し、キンポウゲ科植物においては、太陽の力と月の力が調和をもって結合している」というものである。月に帰属させるべきなのは、生命を宿したすべての液体である。このことは、大まかにはすでに潮の満ち引きという現象に現れており、より微細な部分では成長のリズム、とりわけ極めて印象的には発芽のプロセスに現れている。水的なものの肥大や、成長のすべての段階を通じて減退することなく維持される生殖能力は、サボテンが持つ月の本性を示している。

月がこのように流体に作用するのに対して、太陽の作用に対しては、何よりも空気と熱が開かれる。月の力と太陽の力の相互作用の中で、植物的な変態が流動を始めるのである。しかし、まさにこの変態が、サボテン科植物においては欠落している。水的なものは球体へと自らを凝縮させ、生命力は展開されることなく、内部でせき止められる。空気、光、熱は、このせき止められた構造物の周囲を流動するものの、その外皮においてしか介入することができず、そこですべてを刺化させ、硬化させる。サボテンは、これらの宇宙的な諸力に対して、あたかも自分が一つの「果実」であるかのように対峙しているが、実際のところ、根源的には、球体をした巨大な「子葉」の段階に到達したにすぎない。花から形成されるサボテンの果実も、観察する者にとっては、ただ一段階高く引き上げられただけのサボテンの体にすぎず、トゲだらけで、生命力に満ち、いわばすべての細胞から生殖を行う能力を備えている。

強力なエーテル的せき止めは、その後、短く激しい開花プロセスにおいて解放され、そこでアストラル的な領域へと屈するが、この開花の爆発ののち、即座に再び元の状態へと復元される。したがって、月の力と太陽の力の間の闘いだけがサボテンにとって特徴的なのではなく、エーテル体とアストラル体の間の「強い緊張関係」もまた特徴的なのである。このダイナミズムこそが、治療の目的へと利用されうるものにほかならない。

レコ（J. B. Reko）はその著書『魔術的毒物（Magische Gifte）』（1938年）の中で、メキシコ北部にある、まばらな草がいくらか生育しているだけの、言葉に尽くしがたいほど荒涼とした茶灰色の土の丘が連なる地帯に、ペヨーテ・サボテン（Lophophora Lewinii）の採取の中心地があると描写している。蕪のような形状をした根の上に、刺がなく、頂部に少しウール状の毛が生えた、灰緑色の平らな球体が乗っており、その中心から赤みがかった、あるいは黄色がかった花が突き出る。小さなリンゴほどの大きさのこの植物は、エキノカクタス［ウニサボテン］属に分類される。その中央の帯状部分から切り取られ、乾燥させられた薄切りは、独特の作用を持つ麻薬（ラウシュギフトドローゲ）を形成する。その中からは特に、メスカリン（Meskalin ）およびその同類（関連化合物）などのアルカロイドが検出されている。

サボテン類は、そのエーテル組織が物理的な領域へと介入して成長を野放しに解放してしまうのを、自ら抑制している植物である。彼らは、他の植物であれば生命のみずみずしさの中で芽吹き、生い茂る展開させるはずのものを、硬化させてしまう。そして、この現象がまさに彼らの「リズム組織」に関わっているため、彼らは、こうした自らの異常な生命プロセスの刻印として、人間のリズム系統において、そこで活動している高次の構成元素を追い出してしまうような毒素を形成するのだと理解できる。それはアストラル体だけでなく、部分的にはエーテル体までも追い出すのである。この追い出されたエーテル体の部分が、今度はアストラル体の持つ感覚を異常に活性化させ、イマジネーションの歪んだ原型を呼び起こす。しかし、それは「自我」が完全な意識をもって生み出したものではないため、それを体験している人間を、強迫的な暴力をもってその幻覚の経過の中へと引きずり込んでしまうのである。これによって、ある種の精神疾患に類似した状態が生じる。治療薬としては、ペヨーテ・サボテンは、リズム系統において高次の構成元素が緩んでしまっている状態に対して、適用を考慮できるであろう。

このサボテン科の大部分の、そして最も典型的な植物は柱状に直立しているが、いくつかの種は地面を這い、あるいは重力に抗って闘いながら、岩壁をよじ登っている。そのような種では、エーテル的な力が物理的なものへとより強く介入し、たとえ直線的にではあっても、その硬直した形態を流動へと向かわせる。とりわけ「夜の女王（Selenicereus grandiflorus）」は、西インド諸島の石灰質の崖をよじ登る種に属している。刺は消失しているが、その稜（縦ひだ）からは至るところに気根が突き出ており、そのため茎の構造全体が、地上に現れた「根茎」のように感じられる。湿気に満ちた熱帯の空気は、私たちの地域や、あるいは光の器官・空気の器官である葉や花にしか生存を許さない高山地域の空気よりも、はるかに「地球的」である。そのような熱帯の空気は、地上にある枝や分枝から根を発生させるのである。夜の女王の西インド諸島の故郷においては、この空気はさらに微細な「塩のプロセス」によって貫かれている。したがって、 夜の女王は、最初は大地から離れることができず、自らを熱心に上方へと持ち上げねばならない。

数多く分岐した、膨らんだ茎の幹が一定の年齢に達すると、緑色の枝からあちこちで肉厚の蕾が分岐し、それが膨らんでいく。しかし、それは長さの成長を失っており、あたかも柱サボテンの上に、今度は小さな球サボテンが成長しようとしているかのようである。もはや長さの成長の中で生き尽くすことのできないものは、高密度のトゲの発生として外へと噴出する。しかし、この球状の構造物は、これから形成される花の「下位子房」にほかならない。花は、やがて手のひらの長さ、あるいはそれ以上の大きさになって水平方向へと這い出し、軽さの力（宇宙）と重さの力（地球）の中間の位置を模索し、不確かに太陽の軌道の方向を感じ取ろうとする。しかし、沈みゆく太陽がその開花の時間を連れてくる。一晩だけ、この巨大な花が開くのである。波打つように、ジャスミン、ベンゾイン、バニラ、スミレを思わせる強烈な香りの雲が、この巨大な花から湧き出る。花の力（アストラル性）が、この植物のエーテル組織をあまりにも強力に捉えるため、わずか数時間で完全な萎凋がもたらされ、朝には一本のぐったりとした袋がぶら下がるだけになる。

軽さと重さの間の闘い、しかし同時に、エーテル的な造形力とアストラル的な本質領域の間の闘い――これがこの植物の「指標」であり、それも、夜間に自らを顕現へと導くアストラル性なのである。このようなダイナミズムは、アルカノイドに類似した本質を持つ特定の物質形成の中にも表現されている。治療薬としては、適切な調剤を施すことで、この植物は「心臓」の器官領域に対して作用する。心臓においては、エーテル的インパルスとアストラル的インパルスのリズム的な相互作用が本質的であり、さらに心臓は、人間の身体の生きたトポグラフィー（局所解剖学）において、自らの「場所」として、光と重さの中間の位置を占めている。ここにおいて、地球の力から免れた上部（頭部・感覚）のシステムと、地球の力と特別な方法でせめぎ合っている下部（物質代謝）のシステムとの間の、調和が行われるのである。しかし、このダイナミズムは、心臓に作用するすべての薬用植物に共通するダイナミズムでもある。エーテル的およびアストラル的な本質作用のリズム的な出会いの中にこそ、そもそも人間の「リズム系統（呼吸・循環システム）」が生きているのであり、ここにおいて同時に、空気的なプロセスと水的なプロセスのリズム的な統合と再溶解が起こっているのである。

心臓器官の領域における、一方でのエーテル的な緩み、他方でのアストラル的な痙攣――それはたとえば狭心症（ Angina pectoris ）となって現れるのであるが――は、夜の女王（Cactus grandiflorus）の花と若い茎のシュート（新芽）から作られた製剤の中に、その治療薬を見出すことができるであろう。